
日常が1番ということは非日常が起こってからはじめて気がつくもの

旭日千冬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

日常が1番ということは非日常が起こってからはじめて気がつくもの

【Nコード】

N8242U

【作者名】

旭日千冬

【あらすじ】

銀時、新八、神楽のおなじみの万事屋メンバー。いつものようにだらだらと街を歩いていた。すると目の前でいきなりひったくりが発生して…。

日常とは何なのか。それは何も変化なく問題無くゆるゆる流れる時間。しかし、そんなものは些細なことがきっかけですぐ壊れてしまうものである。

銀「つかよおー、俺らの日常って100%ありえないことでできて

ない？」新「それ言ったら題名の主旨がなくなるでしょうが!!」
神「銀魂の辞書に普通という言葉は無いアル。」新「お前ら黙れえ
エエエエ!!!」

↑はこんな感じですが内容はシリアス…ギャグⅡ7…3ぐらいにな
る予定です。不定期更新です。オリキャラ?がでます。ボロボロの
文章ですがよろしくお願いします。

出だしは今後を左右する

「え？何コレ？何が始まってんの？」

「どうも作者が新しく連載を始めるそうですよ。これはその前置きだそうです。」

「新連載アルか？」

「オイオイ待てよ。1作目は未来永劫休止中。2作目はストック無い無い病に陥ってる中でやんのか？」

「そうそう。たった一回書いた銀魂短編がうまくいったからって次も成功するほど世の中そんな甘くねーヨ。あれは私の力で出来たまです。」

「ちょっとちょっと二人とも。1作目はいずれ再開するって言ってますし、2作目も完全にストックがなくなっているわけじゃないんですから。」

「そんなこと関係無いもんねー。まず今回ののは不定期更新だあ？そんなもんサボってたってわかりやしねえじゃねえか。世の中のだら

しない政治家と同じだろ。」

「銀ちゃん。そのだらしない作者がカンペ持って来たヨ。えっと
：『今回は今まで無いジャンルに挑戦したいと思い投稿する予定です。』」

「今までのジャンルも結構バンジージャンプ並みの挑戦じゃなかったのか？」

「『血潮が噴き出す爽快アクション。』」

「いや、噴き出しちゃだめでしょ。爽快さ微塵もないって。」

「『流血あり。笑いあり。シリアス満点!』」

「言葉矛盾しすぎだろ!! どう展開したら笑いにつながるんだよ!!」

「今がまさに笑い部分じゃないじゃねーのか? だいたい新八。今回の連載のプロットモドキ見たか？」

「『ぼろっとモドキ』って何? 作者偽チチ疑惑アルか?」

「それ以上はやめて神楽ちゃん！いろんな意味でヤバイ言葉になってるから！！」

「そうだなあ、確かに叶姉妹のチチは偽っぱ」

「あんたも乗っちゃってんじゃねエエエエ！！！！」

「それで、作者の書いたプロットが何ですって？」

「あんなのそんな大層な名称で呼んじゃ駄目だぜぱっつあん。あれは駄文箇条書きっていうアル。」

「それでこれがその駄文なんだがな。」

「…。」

「…。」

「…。」

「この棒人間何ネ？いくら文章で状況説明しにくいからって手抜きは行けねーヨ。」

「『確保』ぐらい漢字で書きましようよ。カタカナだらけで外人気取りですか。」

「しかもノート丸々2枚使って終わって無いらしいぜ。」

「ええ！？ラストも決まってるのにちゃんと完結できるんですか？」

「全くネ、ご利用は計画的にが基本。どんだけグータラしてるアルか。」

「あの、作者うじうじし始めたんでやめたげてください。」

「凶星なんだろ。」

出だしは今後を左右する（後書き）

初めての方ははじめまして！それ以外の方はまたよろしく願います。

一応本編はほとんどシリアス方向で行く予定なので、前書き・後書きはそんな雰囲気ぶち壊しで行きたいと思います。また完全に不定期掲載ですので、完成できるかは運のみが左右します。

そんなこんなでぐだぐだですが生温かい目で見られたら幸いです。次回はちゃんと物語に入ります。

恨みの中で食べ物の恨みが1番たちが悪い（前書き）

今さらながらに……。題名もう少し短くすれば良かったと思う自分がいます。

恨みの中で食べ物の恨みが1番たちが悪い

そう、それはいつもの日常。

銀時、神楽、新八はいつものように街を歩いていた。

銀時は気だるそうに歩き、神楽は酢昆布をもぐもぐ噛んでいた。

「なあゝ早く帰ろうぜ。」

「何子供みたいに駄々こねてるんですか。せっかく久しぶりに依頼が来たっていうのに：第一外に出てから10分も経ってないですよ。」

「定期的に糖分取らないとストレスで俺のガラスのハートがバリンバリンの粉々になっちまうの。銀さんは超デリケートなんですー。」

「マジか！！銀ちゃんは全身オリハルコンでできてるじゃないアルか！？」

「何でオリハルコン！？」

でも、そんな日常は些細なことですぐに壊れるものである。

どんと後ろから衝撃を感じた。そうして銀時たちの横からその原因と思われる男子二人が通り過ぎて行く。

神楽の手から酢昆布がするりと音もなく落ちる。そして後には空っぽになったパッケージと砂まみれになった酢昆布だけ。

銀時はどうとしっかりと足を踏みしめていなかったために、無様にぐしゃりと顔から地面につっこんでいった。

沈黙。

しばらくすると、悲鳴が聞こえた。

「ど、泥棒…。」

力の無い声。

先ほどぶつかってきた自転車に乗った若者とローラースケートを着した青年が老婆のバックを強奪していった。これは俗に言うひったくりである。

茫然とその様子を見てしまっていた新八だが、隣から謎のオーラを感じた。恐る恐る振り返る。するとそこには。めらめらと恨みの炎を燃やしている銀時と神楽の姿があった。

「フフフ…。あの二人、知ってるアルか…？」

空になった酢昆布の箱を思い切り握り潰す。原形をとどめていない紙くずは風に攫われた行った。

そして、なぜか笑っている。

「あの…神楽さん？知ってるって一体…。」

「そんなもん、決まっているだろ新八…。」

銀時が顔に付いた砂を乱暴に拭う。
顔も笑っていた。

「売られたケンカは高価買取だ。」

「今なら出血大サービス付きネ。」

「いや、別に売られてないでしょう！？あと出血大サービスの意味違ってる！！」

新八はつつこんだが、言うが早い。既に二人は遠くに走り去ってしまった。

しかたなく遠ざかっていく怒号をBGMに新八は鞆をひったくられた老婆を助け起こすことにした。

恨みの中で食べ物の恨みが1番たちが悪い（後書き）

神楽「ねえ銀ちゃん。ローラーブレードとローラースケートって何が違うアルか？」

銀時「…それはあれだ。クッキーとビスケットの違いと同じだよ。」

新八「わかりづらいわ!!」

神楽「ほうほう。じゃあ銀ちゃん先生。チャックとファスナーとジッパーの区別はどう付ければいいでしょうか。」

銀時「…それはですね。ジッパーは鞆とかに付いてる奴。そんでファスナーは服に付いてるのを言うのだよ。」

神楽「じゃあチャックは？」

銀時「社会の窓を閉めてる奴のことを言う。」

新八「でたらめを吹き込むなアアアアアアア!!!」

衝動に駆られた人間の行動って怖いよね（前書き）

シリアス…ギャグⅡ7…3と書いた割に今のところギャグしか書いていない気がする…。

あらずじ、編集したほうがいいんでしょうか。

衝動に駆られた人間の行動って怖いよね

そう、本当ならばほんのひと時で終わることだった。

金を持っていそうな、そして運動能力の無い老人。そこを重点にターゲットを定め鞆をその手から剥ぐ。その後ある程度離れたら金だけ取り出し、それ以外は川にでもゴミ捨て場にでも置いていけばいい。そうして見事目的のものは自分たちのものにできたのだ。

それだけのはずであった、ひったくりの2人はそう思っていることだろう。

しかし実際は終わらなかった。

「待ちやがれ工工工工工工工！！！」

「何だよあいつら!! どうして追っかけてくるわけ!!?」

「そんなもん俺も知ってるよ!! 喋ってねえでさっさと引き離さぞ
!!」

追いかけている理由が酢昆布と顔面ダイブということは知る由もない。

執念というのは恐ろしいものである。いつのまにか銀時は道脇に置かれていた自転車を少々拝借し、乗り回していた。これでは本末転倒である。もしくはミイラ取りがミイラになったと表現したほうが正しいのだろうか。

そうこうしているうちに一般人である青年二人の体力は限界が近づきつつあった。

「くそっ結構しつけない……。おい武！二手に分かれるぞ！！」

「ああ！！宏も俺より楽なもん乗りまわしてんだからちゃんと振りきれよ！」

自転車男こと宏。ローラースケート青年こと武はその言葉を合図にそれぞれ左右へと綺麗に分かれた。

「銀ちゃんはAを追っかけるヨロシ！私はBをボロ雑巾に加工するネ！！」

「そんじゃ俺はごみくずに変換しといてやるよ！！」

しかし武やら宏やら大層な名前がついても、この二人にとってははた迷惑な通行人A・B止まりである。

銀時、神楽も同じように二手に分かれひったくりの追跡を続行する。

「げえ！？ついてくんなよおっさん！！」

自転車越しに後ろを振り向いたAはそう叫ぶ。逃げたいのに追いかけられたら悪態もつきたくもなるだろう。だが、相手が悪かった。

「……おっさん？」

この言葉に銀時の額に青筋が浮き上がる。これがスイッチだった。

銀時は猛スピードで走行しながら、地面に落ちていた手頃な小石を拾いあげる。一回手のひらで遊び、確認をする。

そして小石を前方50mを目測に構え、手首のスナップで打ち出した。

此処までくれば思い通りである。正確無比に投げられ弾丸となった石はひったくりAの自転車にみごと命中。コントロールを失った暴走車を操れるわけもなく、Aは宙に投げ出された。自転車も横倒しになり車輪が頼りなく回る。

「つてててて……。……。ん？急に暗く……。？」

「人はこれを鉄拳制裁と呼ぶ。」

空から声が降ってきたのに気付いたところにはもう遅い。青年の首には銀時の延髄蹴りが炸裂していた。

悲鳴も上げることも無く、Aは白目を剥き泡を吹き動くことは無かった。

衝動に駆られた人間の行動って怖いよね（後書き）

新八「あの…前書きでも作者言っていましたけど、これってシリアス中心なんですよ？ギャグに重きを置いたものではないですよ？」

神楽「まったく。ギャグセンスゼロの人間が捻り出したお笑いなんぞ痛いだけネ。」

新八「そういう心配はしてないから。」

銀時「大丈夫だろ。次回は一応ギャグ路線脱却してっから。」

神楽「よくこの展開から持って行けたアルな。」

新八「確かに。」

ギャグセンスゼロの作者にシリアスセンスはあるのか！？次回、ついにあの人が…！

銀時「作者が痛い予告してるー。うわー寒ー。これならクーラーいらないんじゃない？」

新八「なんてひどいこと言うんだアンタは！！これでもきつと頑張
って捻りだしたんだよ！！」

神楽「同じメガネ仲間だからって庇う必要はねえぞメガネ。」

雑魚キャラは早く死ぬかしぶとく生きるかの2パターン（前書き）

今さらですが…。

後書きでの銀さんたちの会話は楽屋裏みたいなものと思ってください。ですのでまったく関係ないことを出したりします。基本息抜きのもりですので、何かこの話題を！とアイデアがあればどしどし感想にてアピールして下さい。その他誤字脱字の指摘、純粋な感想なども随時お待ちしております。

今回はやっとシリアスぽいお話です！

雑魚キャラは早く死ぬかしぶとく生きるかの2パターン

「くらえ！三沢●春エルボー！！！」

「ぐぼはっ！！？」

神楽のラリアットが青年Bこと武にヒットする。ローラースケートを装着していたため、足の歯止めがきかずに見事な円を描いて後頭部からダイブしていった。ひったくりをしただけで首だけでなく、頭までぶつける羽目になるとは思わなかっただろう。哀れである。

「ふう、この歌舞伎町女王神楽様から逃げられると思ったら大間違いネ。」

捕まえられた男は目をぐるぐる回してこそすれ意識ははっきりあつたらしく、悔しげに「くそう」と呟いた。

神楽は現在地はどこか考える。昼であるのにとっても薄暗い。頭上だけ綺麗な青色であった。追っているうちにどうやら人通りの少ない裏道に来てしまったらしい。ううむと唸った。ひったくりをあの手金泥棒に引渡したり、新しく酔昆布を買ったり、万屋に帰ったらドラマを見たりとやることはとても多い。

「随分変な所に来てしまったアルなー。早いとこ銀ちゃんたちと合流しな——」

「やっほー。」

上空から声。聞きなれた、あり得ない程呑気な声であるのに神楽の身は強張る。しかし神楽の体が固まっていたのは一瞬。すぐさま聞こえた方向に視線を映す。そこには誰もいなかった。否、その男は自分の目の前にいた。

「遅いよ。」

声が聞こえるのが早い。神楽の腹部に衝撃が走る。

「が……!!」

男の拳が神楽の細い腹にめり込んでいた。そこまで力を入れているようには見えないのに内腑がごとく破壊される。肋骨も幾本か折れてしまったであろう。軋んだ音が耳に届く。

神楽の体はは前のめりに地面へと倒れ、そして内臓の損傷に耐えきれず、せり上がってきた血を吐きだした。ぼたぼた垂れていく血が地面を朱に染める。何が起こったのか分からず神楽は意識を手放した。

そんな様子を男は無言に見つめる。出来たばかりの血だまりにはそ

の場には似つかわしくないのであろう笑顔が映っていた。

男は神楽の小さな体が無造作に背負う。そうして今気がついたかのように何もできず呆けている青年に顔を向けた。だが向けただけで仮面のような笑顔が崩れるというわけでもない。

。そのまま天へと向かって跳躍した。

後には一部始終を見届けた青年と神楽の傘と血痕だけであった。

雑魚キャラは早く死ぬかしぶとく生きるかの2パターン（後書き）

銀時ら、某国民的アンパンアニメ視聴中の会話←

銀時「愛と勇気しか友達がいなくてかわいそうな奴だよなあ…。」

神楽「このままじゃ老後孤独死するのが目に見えてるヨ。」

新八「それは歌詞であって本編はそうじゃないでしょう。ちゃんとジャ●おじさんとか食●ンマンとかカ●ーパンマンとかいっぱいいるじゃないですか。」

25

銀時「アイツらはな。『仲間』であって『友達』じゃねえんだよ。緊急時のみ助けあう、そういう契約だけの間柄なんだよ。」

神楽「違うヨ銀ちゃん。アレらは引き立て役でそこらへんの雑魚やモブやメガネと同じ扱いネ。それだけの価値しかないキャラがあற்பらんと同じ位置に立とう何ぞ100年早いアル。」

新八「国民的アニメになんてこと言うんだアンタらはアアアアアアアア…！」

本編との温度差が恐ろしい…。

虫の知らせほどいい加減なものはない（前書き）

不定期更新と銘打ったわりに4日毎と更新になっていたことにさつき気が付きました。ただこんなペースはずつと続きはしないので…。特に学校がまた始まったら絶対に無理です。

前回あの人が出る…!といった割に名前を出すのを忘れました。今回出ます。

虫の知らせほどいい加減なものはない

「まったく神楽のヤロー、何処まで行きやがったんだ。」

「こつちに曲がつていったのは確かなんですけどね…。」

新八がきよろきよろとあたりを見渡す。しかし赤いチャイナ服を見つけることは叶わなかった。

銀時が自転車少年に一撃必殺を決めた後。昏倒したAと拝借していた自転車を交番に投げ入れて新八と合流したのであった。

銀時は面倒くさそうに頭を掻く。

「これは誰かに聞いたほうが早いかもしれませんね。あのすみませーん。」

「ん？ おお、銀髪の兄ちゃんに眼鏡の坊主！！今日は月曜日じゃねえぞ？」

「いや今日はジャンプ買いに来たわけじゃないので…。」

「そうなのか？ いやー兄ちゃんが来る時はいつもジャンプの発売日なもんだからよ。そういうやあ今日はあのお譲ちゃんは一緒じゃないのかい？」

新八は銀時行きつけの本屋の店主に話しかけた。店主は朗らかに笑い2人迎える。

ジャンプしかイメージが無いと言われた銀時は不服そうに眉を顰めたが。

「あーはぐれちまってよ。今探してんだ。見てねえ？」

「俺さっきまで裏で品出ししてたからよ。そんなときに通って行っ
たら見てねえな。」

「そうですか。ありがとうございます。他当ってみましょう銀さん。
」

「だな。邪魔したなおやっさん。」

「たまにはジャンプ以外も買ってってくれよ。」

適当に返事をし、銀時らはその場を離れた。

人が波のように多く行きかう。これなら一人二人捕まえて聴いてい
けばそれなりの情報は集まるであろう。大きく欠伸をし、地面を踏
みしめる。

「まだこんなところにいるの坂田さん。ここから真っすぐ右手側3
つめの路地。早く行って差し上げたらいかか？」

「え…。」

凜と澄んだ女の声。

銀時は急いで振り向いた。しかし見えたのは人混みだけ。聞こえる
のもたわいもない会話のみ。声をかけたと思われるような影は見当
たらない。

「銀さん？どうかしましたか？」

「——いや。」

口ではそういったが、心内では氷のような冷たさが降りていた。

そう、それはまるで予感。虫の知らせと呼ぶものだろうか。

銀時は合図もなく走りだす。波を思わせる紋様の着物が風に揺れる。その耳に周りの声も風を切る音も新八の声も届かない。体は己の衝動と不安に駆られ動くだけ。女の言葉通り右手側3つめの路地に曲がる。そして道なりに奥へ奥へ。幾度か角を曲がり、そのたびに砂埃をぶわりと巻き上げた。

たどり着いたのは昼間でも薄暗い空間。そこにいたのは神楽が追いかけていたローラースケートを装着した青年。そして。

神楽の傘と、地面にできた赤黒い滲み。

その染みがなんなのか確認するまでもなかった。銀時が昔、嫌になるほど見てきたもの。

銀時はおもむろに放心状態の青年の胸ぐらを掴み、無理やり立ち上がらせる。

「あ…アンタは…。」

「おい。神楽はどうした。」

「カグラ…？」

「テメエを追ってたチャイナだよ。何処に行った。」

「ああ…。俺にも…よくわからねえよ。上から男の声がしたと思ったら、目の前にいてチャイナ娘の腹殴ってた。そしたらチャイナ、血吐いて倒れて…。」

「銀さん急に走り出して一体何——！！これは…!?!？」

少し遅れて、息を切らした新八が到着した。そして場の状況を見、驚愕する。

青年は言葉が続ける。

「そんでそいつがチャイナを抱えて、こっちを見たんだ…。そのまま立ち去ってっただけ…。だけどそいつずっと笑顔で、それが逆に怖くて…俺、殺されるかと思った。」

「…なら顔覚えてるよな。どんな奴だった。」

「ピンクの髪に…青い目で肌がやけに白かった。そういえば…顔チャイナに似てた。」

「…！」

「神威か…！！！」

そう、日常なんてすぐに壊れるもの。何かの拍子で、何の前触れもなくあつという間に崩れてしまう。そうして気がついたころには残骸しか落ちていない。

しかし銀時と新八は気がつかなかった。

声が聞こえた時。笠を目深にかぶった女が自分たちを見ていたことを。

かすかに覗く真っ赤な唇は笑みの気配を模っていた。

虫の知らせほどいい加減なものはない（後書き）

そう前回のあの人は神威でした！自分の書く神威はどことなく変態ぽくなるのでファンの方々に投石されないようにを注意します。だが謎の女の正体は！？続きは次回で！！

銀時「何続きはWEBで！！的に言っちゃてんの？次回が続きになるのは当然だろうが。」

神楽「でもよく過去バナにぶっ飛ぶのあるじゃん。」

新八「前回の補足説明的な心情描写になったりもしますがどそれはどうなんですか？」

銀時「テメェらどっちの味方！！？買収でもされてんの！？」

神楽「番外編のときもあるヨ銀ちゃん。」

最近ボケ側の銀さんしか書いてなかったので久々につっこみ銀さんを。しかし大分失敗した気がします。感想お待ちしてます。

子供には年くってもそれなりに似合う名前をつけろ（前書き）

『雑魚キャラは早く死ぬか』の後書き部分を少し訂正しました。
歌詞の無断転載に関するお知らせとやらが届いてしまいましたので
…。出来るだけ注意はしてたんですが、いざ届くと薄ら寒いものを
感じます。

子供には年くつてもそれなりに似合う名前をつけろ

——そこはまるで地の底のような。

ぴちよん。ぴちよん。規則的に、しかし落ちてくるところに法則性は無い。

そのうちの一粒が神楽の白い頬に当たった。神楽は瞼を震わせ、ゆるゆると瞳を開いた。

ぼんやりとした頭でまず理解したことは、今自分がいるのは薄暗い空間だということ。そしてこの空間での光源は頼りない蝋燭だけであつた。だんだんと目が慣れていく。

そしてまず見えたのは鉄格子。

混乱する頭。なぜ鉄格子？じやらつと重たい響き。最初は気がつかなかったが両腕は天井に伸ばされ鎖で壁につながれている。左足も同様に拘束されていた。自由なのは右足だけである。床や壁は石造りでひんやりとした空気を纏っていた。

しばらく時間が立つと自然に頭が覚醒していく。

この状況を見るに自分はアイツに拉致されたのだろう。この時分を誘拐するなんてと神楽は煮えくりかえりそうなほど腹が立っていた。此処から抜け出すためには情報がある。神楽はじっくり現在の状態を確認した。

自身を縛っている鎖や鉄格子自体は特別製ではなさそうだ。思いきり力を入れれば簡単に破壊することは可能だろう。

だが殴られた損傷が大きかった。随分と時間は経っているはずなのに今だ完全にいえてはいない。鈍い痛みが体力を奪っていくと同時に力が抜けていく。こんな状態では壊すことは無理である。しかし夜兎の治癒力をもってすれば治るのにそう長い時間はかからないはず。

でも回復するのなんか待っていたら、遅い。アイツが来てしまう。

「……っ。」

無理やり鎖を引っ張ってみる。だが、地球を引っ張っているかのようにはそれは微動だにしない。腕と腹の痛みだけが返ってくる。

心配、しているだろうか。

急にいなくなってしまった自分。あのひったくりが生きていれば状況を聞いているかもしれない。もしかしたら、危険を冒して来てしまいかもしれない。甘い、幻想かもしれないけれど。

助けに来てほしい。そんな気持ちもある。でも、来なくていい。だってこんなところに来てしまったら、いくら最強の侍でも傷を負ってしまう。

「銀ちゃん……。」

複雑な心境の中。心細く呟く。

「随分早いお目覚めね。まだ寝てるかと思った。」

突然空気の淀んだこの場に似合わない、凜と澄んだ声が聞こえた。神楽はその声の主を見ようと暗闇の中、目を凝らす。すると、そこには一人の女がいた。

墨色の単衣のような薄い生地を着物。その裾は太もが見えるほど

短く切られていた。だがその腿がすべて露わになっているわけではなく、膝上まであるタイツが一部なりとも隠す。そしてヒールが高いロングブーツを履いている。

全身黒色でまとめている中、異様に目立つ赤色の帯、そして紅色の羽織を肩からはためかせている。ずり落ちない様光沢のある山吹色の紐を胸の前で結んでいた。

黒耀の瞳はまるで淀みない。腰まで伸びる黒髪は肩口までは真っすぐ伸び、そこから下は緩やかに波打っている。髪はすべて下ろしているわけではなく一部後頭部にかんざしで結っていた。優雅な口調で話す唇は真っ赤に彩られる。まるで、血を唇に塗ったように。

「……あんた、誰？」

「そんなに警戒しないでよ。私からはあなたに何かしようって気はないんだから。」

「答えになって無い。」

「まったく……焦らないの。直ぐにでも教えてあげるわよ。私の名前は白鳥梓。しらとりあずさ通称は『鴉』。そう呼ばれているわ。」

「鴉？」

「ええ。奇兵隊で機密工作ゼロ班実行長を任されている者よ。」

「鬼兵隊？春雨じゃないアルか……？神威は春雨でシヨ。」

「まだ寝ぼけてる？鬼兵隊は宇宙海賊団春雨と同盟を結んでいるのよ。此処に私がいたとしても全く不思議はない。」

「……。」

「今はそのことより自分の状況を心配したら？」

そう告げた声は閉鎖された空間にやけに反響した。

子供には年くってもそれなりに似合う名前をつけろ（後書き）

そう！あの謎の女はオリキャラでした！！

ビジュアル的（服装）は本編でうだうだ書いてありますが、作者イメージでは

（月読十さっちゃん）÷2

です。

顔は…読者様のご想像にお任せします。

さあ、このオリキャラがどう物語に絡むのか。少しこの牢屋のシーンが続きます。

今回楽屋裏はお休みです。

花火を見る時ストレートネッグだとつらい（前書き）

銀時 「人は嘘つく生きもんだよなア…。」

新八 「え？いきなり何たそがれてるんですか？」

銀時 「楽屋裏コーナー作りましたって宣言した次の回ではもうお休み。おまけに再開したと思ったら後書き制限もう突き破って前書きになってんし。荒●弘センセー見習えよ。ハ●レン一度も休載したこと無かったじゃん。」

新八 「そんな大先生をここで比較対象として出すんじゃないよ！！
っていうかあんたジャ●プ派だろうが！！何で小●館！？せめて集●社にしroyよ！！！！」

神楽 「なら講●社ならぎりOKアルか？」

新八 「ぎりもないわ！！」

銀時 「なら●迅社。」

新八 「そのネタわかる人何人いるの！？」

そんなわけで本編どうぞ。

花火を見る時ストレートネググだとつらい

「今はそのことより自分の状況を心配したら？」

この言葉に神楽はびくりと反応した。そんな反応を面白いかのようにくすくすと梓は笑う。

「強がってるわりにけっこう寂しがりやなんだ。ホント、うさぎみたい。」

「別に寂しがってなんか……！」

「じゃあ何でもないのに人の名前なんか呟くんのだ。」

「うぐ……。」

もごもごと口を動かす。何か言い訳を考えるが結局思いつかないらしい。

「……そんなに信用してるのね。坂田って人。でも意外と期待外れだと思うけど。」

「なんで？」

「あなたが危険な目に合ってる時。何も知らずにのんびりとあなたを探してたのよ？そこは虫の知らせが来るとか、第6感が働くとかで気づかない？結局通じ合っていると感じてるのはあなただけ。悲しいものね。」

「……。別に。」

梓に向いた神楽の顔は絶望の色。ではなく全く曇っていない綺麗な
ものだった。

予想外な瞳に思わずたじろぐ。

「銀ちゃんにそこまで求めるのは酷アル。あのぐーたらに働きの
虫が知らせてくれるわけ無い無い。逆にあずー、意外とファンタジ
ーな考え持ってるね。驚きネ。」

梓は別の意味で驚いていた。

嘘を言っている顔ではない。から元気を振りまいているわけでもな
い。なのに、どうしてこんな顔ができる？

「あんなぐーたらでもやる時はやるヨ。たまたまそのスイッチが入
って無かっただけ。だって銀ちゃんは1度護ると決めたことは護り
通す侍なんだから。私はそんな銀ちゃんが大好きアル。普段からし
っかりしてる銀ちゃんなんて銀ちゃんじゃ無いネ。」

真っ暗やみの閉鎖された牢屋で、一輪。太陽みたいな笑顔が咲いた。

「私はそんな銀ちゃんを信じてる。」

何も言い返さず、きよとした顔の梓。神楽も表情を崩さない。
しかし、せつかく咲いた花もすぐに枯れた。跡形も残さず霧散する、

そうまるで花火。

足音が二つ、耳に届いた。そしてすぐその主は姿を見せる。

真っ暗やみの中これまた黒い服で見にくい。それに反する白い肌や桃色の髪ははっきりと映った。

花火を見る時ストレートネッグだとつらい（後書き）

えー…一つ補足をさせて下さい。

神楽ちゃんが言っている「銀ちゃんを信じてるよ発言」に対して。決して「銀さんが自分を助けに来てくれる」ということを信じているという意味ではありません。そこはご了承くださいたいです。「銀さんは自分のことを裏切らない。信用できる大事な人」というような意味で「信じてる」なのであります。

補足しないとわからないっていうのもどうかと思うのですが…。なんか前回と神楽言ってること違うじゃんとなってもまた困るので。でも次回も：こんな補足説明付くんですよねこれが。なので楽屋裏劇場もまた前書きに出張します。

女性にやさしく、ヤローに厳しくが基本じゃないの？（前書き）

銀時「新八ィ…。」

新八「何ですか銀さん…。」

銀時「俺ら、出番なくね？」

新八「そうですね。」

最近出番のないお2方でありました。

女性にやさしく、ヤローに厳しくが基本じゃないの？

足音の主は神威と阿伏兔。

梓は2人に神楽の正面を譲り、自身は腕を組み手短な壁に凭れた。

「神威……！」

神楽が唸るように声を上げ、悠然と立つ兄を睨みつける。

揺れる同じ髪。

その髪から覗くのは同じ瞳。

でもその顔は笑顔と怒りとで違っていた。

「おひさ〜♪元気？」

「人ぶん殴つといて元気もクソもあるわけ無いだろ。私連れさって何する気ネ!!」

「ん？会話もじっくり楽しんでくれないの？」

「団長……じゃなくて提督。この状況で楽しもうって思う肝据わった奴アはいないと思うぜ。」

「同感。まあしつこい女も男も嫌われるわよ。」

「悪ふざけはよしてヨ!!」

「はいはい。わかったよ。……俺はね、あのお侍さんとお手合わせしたいだけなんだ。」

「お侍さん……銀ちゃんのことアルか。銀ちゃんがお前のきまぐれなんかに乗るわけ無いでしょ。」

「そのための神楽じゃないか。」

「!まさか……。」

「そう、お譲ちゃんは餌だよ。そうすれば嫌でも来るしかないだろ。」

「……それ以外のこともやってもらおう予定だけだね。」

何処か引っ掛かるような言い方をする梓。そしてどこことなく、黒い響きを模していた。

「提督さん。」

神威に向かって、何かを抛った。神威の手に収まるとちゃりんと金属音を奏でた。

そして受け取った鍵を使い、錠を解除する。重そうに牢屋の戸が開く。そこへ神威が鍵束をくるくる回しながら牢の外から中へと入っていく。

神威は散歩をしているかのように自然に神楽へと足を進める。そしてしゃがんだ。神楽と神威はが真正面絡み合う形になる。

そしておもむろに神楽の胸元に手をかけ、肌を露出させた。

「な……!!」

頬が真っ赤に紅葉する。しかしそんなことに気もとめずに神威は『ある物』を取り出した。

神楽の目には、暗闇のせいでそれがどのようなものか見えない。だがそれを見た途端、全身の毛が総毛だつぐらいの恐怖に襲われた。がくがくと震えだす。汗が噴出する。

わからないまま、体は拒否をする。だが、唯一自由であった右足は抑えられ動かすことさえままならない。

「あ……。」

喉がからからに乾いてまともな声が出せない。

抵抗もできないまま、『ある物』は神楽の胸に近付いていく。

蠟燭の灯が一瞬揺らめいた。

女性にやさしく、ヤローに厳しくが基本じゃないの？（後書き）

謝罪と弁解をさせてください。

神威が神楽の胸部を露出した。と捉えてもよさそうな文がありますが、あれはいわば鎖骨よりは下ですが思い切り胸ではありません。ポロリではなく、あくまで「胸元」です。なので神威にR18指定行為をさせたわけではありません。

誤解を招く文章を掲載してしまうことに深くお詫び申し上げます。

次回はあの方々が登場。そして残念ながらほんの少しの間神威・阿伏兔・神楽、特に梓の出番がなくなります。

公共施設ではお静かに（前書き）

今回は過去最高の長さです。携帯読者様！大変読みにくくなつてしまつて申し訳ないです。

またお気に入り登録ありがとうございます！なんと2件も！（こんなことで喜ぶなよと言われそうですが…。）それでちよつと飛び跳ねてました。そしたら柱の角に中指（足）をぶつけて痛いです。感想もちろんお待ちしてます！！

今回後書きにも話が続きます。

公共施設ではお静かに

あの状況は何だったろう。

お茶を持って行った下っ端隊士はそう思ったことだろう。

胡坐をかき、気難しい顔をした真撰組副長土方十四郎。足を投げ出し、死んだような眼をして鼻をほじっている万事屋店主坂田銀時。そしてその従業員その1志村新八はどうしていいのか分からず、きちんと正座をして土方に向かい合っていた。

「おいおいお茶だけかよ。しけてんなー公務員。わざわざ現行犯で捕まえたひったくりを屯所まで連れてきてやったのに何この冷遇。菓子ばー？」

「テメエ何ぞ茶でも贅沢過ぎるぐらいだ。」

「じゃあせめてイチゴ牛乳。」

「今の言葉でどうしてその選択肢が湧いて出てきた。」

土方の顔面には青筋が走っていた。その手からかちりと音が立ち、ライターから火が吹き出した。その火は煙草へ燃え移り、狭い部屋の天井へ煙が舞いあがる。

「いらついてんなー多串君。近い将来リー●21にお世話になるんじゃない？テレビに出たら教えろよ。」

「お世話になる前にまずテメエのふざけた頭を刈ってやるよ。あと俺の名前は土方だっつってんだろうが。」

「ま、まあまあ落ち着いてください二人とも。」

「ったく。ひったくりやら無駄話に人員割くほどしてるほどこっち

は暇してねえんだよ。」

灰が銀色の灰皿に静かに落ちた。紫煙がふよふよと空気に混じり合う。

本気でイラついているところをみると何か事件でもあったのだろうか。そう新八は思い当る。よくよく考えてみると今日の屯所はやけに騒がしい。運動会でも起きるのかというほどの大人数の隊士たちが走っている。しかし半面、鳥のさえずりかと思うぐらいに話し声は小さいのである。

「あの、土方さん。なにかあったんで」

「おーい何さぼってんだ税金泥棒。死ね土方。」

やる気を全く感じられない声が襖の開くのと同時に降ってきた。そこにいたのは1番隊隊長沖田総悟。その頭には彼愛用のアイマスクが装着されている。

「さぼってんのはお前だろうが総悟！あと最後の関係ねえだろ！！」

「税金泥棒って沖田さんあなたもそうじゃないですか？」

「総五郎君イチゴ牛乳1杯。」

「あんたはまだ諦めてなかったんかい！！」

「旦那ァ。総五郎じゃねィです、総悟でさァ。」

沖田は大きく欠伸をし、土方に向かって書類を投げつける。
イチゴ牛乳の注文はあっさりと却下されていた。

「こんなもんでいいですかイ？」

「一般人の前でその話振るんじゃないやねえよ。」

「あれ？俺たちマブダチじゃなかトツシー。友達の間では隠しごといけないうって常識だろ。」

「いつ何処で誰がお前のような砂糖人間と友達になったんだ。ちょっと待てなぜ腕を肩に回す！暑苦しいだろうが！半泣きの真似しても変わらんわ！！」

「えっと……。何か事件でもあったんですか？やけに屯所が慌ただしいですけど……」

「宇宙海賊団春雨の目撃情報があったんでさア。」

「総悟！！」

悪ふざけではなく本気で怒鳴りつける土方。湯呑みの茶に波紋が広がる。

銀時と新八の表情が強張ったのに真撰組の2人は気がつかない。

「旦那に話すぐらい別にいいじゃないですか。」

「あのなあ……情報漏れたら奇襲も何もなくなくなるだろうが！！」

「へえゝ奇襲なんて考えてるんだ。何処ですんの？」

しまったと冷や汗を流す土方。しかし思った時にはもう遅い。冷や汗の隣には嫌な笑いを含んだ沖田が控えている。

「副長オ。もうここまできたら駄目ですよ。むしろ旦那の場合。場

所教えておかないと逆に妨害されるパターンでさア。」

「ええ？ そんな無粋なことはしないよ総五郎君。ただ何処でやるか知らないとさあ、間違えて鉢合っちゃう可能性もあるじゃん。」

「……銀さんの言うことに僕も一理あると思います。何処で実行予定なんですか？」

しばし沈黙。その間、万事屋&メガネは視線を土方から離さない。何だろうかこの謎の圧力。

そして大きなため息だけ土方の口から零れる。力任せに煙草を灰皿に押し付けた。途切れなく吹いていた煙はあっけなく消え去った。

「つたく。言いふらしたら即刻その首跳ねに行くからな。」

公共施設ではお静かに（後書き）

「そんなトツシー。」

「誰がトツシーだ!!」

「そんなにキレて何かあったんですかイ、トツシー。」

「今まさに起こってるわ!!」つかテメエもどさくさにまぎれて言うんじゃねエエエエ!!」

不毛な会話をし、銀時らは屯所から家路へと向かっていった。

「……トツシー。」

「まだ言うか!!」

「へいへいわかりやしたよ副長!。それで、珍しくチャイナいませんでしたね。」

「ん? ああ。朝からダチんとこ遊びに行ってるんだと。」

「そうなんですかい? でも昼ごろひったくり追っかけてる時アイツも一緒に追っかけてやしたよ。」

「ちよっと待て総悟。オメーまさか…。」

にたりとどす黒い笑みを浮かべる沖田。

「総悟……見回りサボンじゃねエエエエエ!!」

怒声が綺麗なだいだいの空に飛んで行った。

そして土方と沖田は知る由もなかった。

帰り際。銀時と新八の目が何か決意したかのように鋭く光っていたことを。

奇襲のほとんどは王道だったり（前書き）

何で真撰組が出る回は長くなるんだ…！

余談。沖田が少し書きにくいです。口調とかボケが。土方さんは気をつけないと別人になりそうで怖いです。近藤さんは…少しくらい違っても違和感が少ないので楽です。

奇襲のほとんどは王道だった

『――A 6、配置にきました。このまま待機に入ります。』

『――こちらE 2。準備できました。』

『――D 2地点、OKです。』

本日の天気は曇り。それは夜になっていてもあいも変わらず。今は頭上には少し翳った月だけが寂しく浮かんでいた。

赤色の電源ランプが夜の中だと少し眩しい。その通信機からは聞きなれた隊士たちの声が次々と送られてくる。電波の状況に左右され、ときどき耳障りな雑音も混じる。

『――すべての地点配置確認完了。各自そのまま待機。合図が出るまでは気づかれないようあたりの警戒は怠るなよ。』

少し抑えた土方の声が路地に落ちる。その場には険しい顔をした土方の他に、ガムを噛む沖田とペンライト片手に資料を眺める近藤。その二人もいた。

「……決行まであと20分か。総悟準備できてるか？」

「出来てるんですか？ 土方さん。」

「なぜ質問を質問で返すんだ。」

「安心してください。アンタを切り刻むくらいは出来まасаア。」

ガチャツとバスーカ砲を手にする沖田。

「バスーカ砲をぶっ放すことを切り刻むと言うかテメーは……！」

「あ、間違えた。木端微塵だった。まあ…死んじまえばどっちでも変わりゃしゃせん。」

「……先にをたたっ切ってやろうかオイ。」

ここで大声を出すと敵に勘づかれる可能性がある。そのため土方は声量及びつつこみたいのを懸命に抑える。難儀なことである。

「総悟、今回の作戦はそれ使わないから。さっさとしまっちゃいなさい。」

「近藤さん何言ってるんですかい？これは俺の標準装備です。」

「標準装備！？自衛隊かお前は……！」

「土方さん。声でか過ぎやしませんか。」

「ぐ……。」

「総悟。トシで遊びたいのは分かったから。ホントにそれ片づけてくれ。」

「へいへーい。」

手慣れたようにバスーカ砲を分解していく沖田。あっという間にコンパクトサイズになった。そして後で回収できるようにゴミ箱に隠しておく。

「……トシ。ちよいとここを見てくれ。少し、気になることがある。」

「

そんな緊張しているのか緩んでいるのか。よくわからない空気の中。いつになく真面目な近藤が資料を指さし尋ねた。

「何処をだ？」

「上から5行目からだ。」

狭い路地の中、小さい明かりを頼りに指さされた場所の文字を目に通す。

——歌舞伎町商店路地裏街にて、宇宙海賊団春雨団員と思しき目撃情報が多数。聞き込み・裏付け捜査を行うと偽情報ではなく信用できるものであった。同時に春雨が潜伏している廃ビルの特定にも成功。潜入捜査の結果ビル内にいるのは春雨第7師団と判明。地球偵察に派遣に来ているものと予測される。

山崎退が作成した調査書。手書きで書かれた書類に特におかしいところは無いように思える。当の山崎はここからさらに詳しく情報を得るため調査を続行していた。

「これが？」

「おかしいと思わんか。春雨がこの発見されたビルにいるのは確かだ。だが、なぜ一般人は出入りしているのが春雨とわかったんだ？」

「考えてみればそうですねィ。『私は春雨に所属しています』なんて看板掲げて歩いてるわけじゃないんですから。」

「春雨自体に特に決まった服装や特徴があるわけではないし、あったとしても見分けられるとは思えんのだ。しかも貧困地区に目撃証言が集中しているのも気になる。」

「そうなると、春雨自身の買収：か？」

「そんなことしても春雨に利点なんて無いでしょう。」

「しかしそれ以外考えられん。春雨に喧嘩を売って得する天人の集団こそいないしな。」

在りすぎる情報。それは直結して罠ともいえる。もう少し叩けば埃が出るであろう。そうして相手の出方がわかったところで突入すればいいのだ。わざわざ危険とわかっているところに急いで入りこむ必要はない。

しかし、真撰組を背負った者たちの考えは違った。

「あのビルに春雨がいる。それだけで十分じゃねえか。」

「俺もそう思いやす。罠だろうがなんだろうが、要するにぶっ叩いちまいやそれでおしまいでさァ。土方と同じってのが不服ですがねィ。」

「……がはははは!! 俺もそう思う。あれこれ考えても似合わねえわな俺たちには。まあ何かあった時はそんなときにやりやいい話だな。」

「そんなじゃとりあえず。春雨確保も重要ですが1番は。」

「死ななけりやいいんだろ? 近藤さん。」

「ああ!!」

そして、作戦決行の合図が待機している隊士たちに放たれた。

奇襲のほとんどは王道だったり（後書き）

銀時「ちよつと待ったアアアア！！」

新八「いきなりなんですか！？」

銀時「銀魂の主人公って俺だよね！？最近すんごい影薄いんですけどお！スケ●ンのボツ●ンより薄くない！！？このままじゃ俺空気と同化しちゃうじゃねえか！！」

神楽「ふざけんなヨ作者ア！！私をあんな目合わせといて何でたかが公務員の出番がこんなに多いんだゴルウアアアア！！」

新八「殺気しまって二人とも！！あああどこからともなく瘴気が！！」

こそつ。

銀時「今さら何の用だ作者！！ん？またカンペかよ！！」

神楽「『第3回銀魂人気投票、私銀さんに入れました。だから許して？。』」

新八「？に合わないな作者！！」

銀時「『そこツツコむでないダメガネ！！』」

新八「細か過ぎるわカンペ！！…ん？『ちなみに作者内2位は…近藤さん』？」

銀時・神楽「それが原因かああアアアアア！！！」

カロリーメイトに水は必需品（前書き）

丁度真撰組の方々がお外で張り込んでいる時のビルの中の様子です。正直急に仕上げた話、後付け？なのでいろいろおかしいところがあるかもです。

ちなみに。書き忘れてましたが歌舞伎町四天王編後の話なので一応神威は提督です。なので阿伏兎は「团长」ではなく「提督」と呼びます。

また長いです…。

カロリーメイトに水は必需品

静かの夜。だがそれももうすぐ終わりを告げ、太陽が顔を出す。それと同時に騒がしい朝が始まるだろう。外には江戸の治安を守る幕府の狗。真撰組が張り込んでいることは既に気が付いていた。窓に顔を出すことは流石に憚れるので、姿が見られぬよう窓と窓の間の柱に寄り掛かる。

ここは廃ビルの中。上の階に位置するとある一室に梓はいた。梓の他に、神威、阿伏兔。そして春雨の下位団員1人。そして昏睡している神楽がこの空間にいた。

かち。かち。かち。

廃ビルと思いきや床は意外と近代的なものが乱雑に置かれている。ペットボトルに空き缶、コンビニ弁当カップ麺おにぎり菓子パンなどなど。しかしそれらはもうただのゴミくずで肝心の中身は1人の青年の腹に収められていた。

お楽しみにとっておいた唐揚げを神威は口の中にほおりこむ。咀嚼し、そして不満足そうに息を吐く。

「こんだけじゃ足んないよ阿伏兔お。もっとちょーだい。」

「はぁあ！？お前もう20人前は食ったろ！！」

「お腹減るんだもん仕方ないじゃん。」

「腹が減っては戦ができぬ。そう言いたいのですか提督さん？」

「そーそー。」

かち。かち。かち。

梓は手に持っていたカロリーメイトを神威に投げる。

「さんきゅー鴉さん♪」

「おいおい甘やかすなよお譲さん。ただでさえ歯止めがきかねエツてのに。」

「途中で腹減ったー、でやる気失くされると困るからです。甘やかしているわけではなくてよ。」

そう言って梓は柱から体を離す。ヒールの独特の足音を立てながら部屋の出口に向かう。

「何処行くの？」

「準備です。男の前で着替えろと？」

「まさか、そんな冗談はさすがに言わないよ。阿伏兎は残念そうだね。」

「俺に変態フラグ立てるなすつとこどっこい！！」

「時間までには間に合わせます。」

そんなボケに見向きもせず、梓はそのまま部屋を退出。男密度が上がったむさくるしい空間ができた。

かち。かち。かち。

「…鴉のお嬢さんは気難しいねえ。」

「ねえ、結構皮肉じゃない？」

「何がだよ？」

「だってさ。『白鳥』なのに『鴉』だよ。シンスケも面白いことするよねー。阿伏兎お茶。」

「俺はあんたの召使じゃないんですけどねえ…。」

これってカロリー取れるけど水分取られることない？と文句言いつつもしつかりとカロリーメイトを完食する。

かち。かち。かち。

にこやかに細められた瞳が開く。真顔で阿伏兔に問う。

「…ねえ、止めちゃ駄目？」

「駄目に決まってるんだろ。」

それは一蹴されたけれど。

部下は首を傾げた。何を止めるんだろう？

そして部下は自己完結する。

ああ、小娘の息の根のことか。

暗い廊下を一人。梓が歩く。
不意に足が進まなくなり、止まる。
思い出すのは神楽のあの言葉。

——銀ちゃんを信じてる。

別の声が重なる。

——お兄ちゃんを信じてる。

神楽の咲くような笑顔。二つに結った姿はまるで可愛い耳。
二つに結っているのは同じだけれど彼女の髪は桃色ではなく黒色。
でも表情は全く同じ。太陽のように暖かい。

「……さち。」

小さくあの子の名を呟いた。あの子にはもう、届くことは無いこの言葉。もうあのあたたかな笑顔に触れることは叶わない。

愛おしい彼女を思い出すたび、あの男への憎悪が燃え盛る。爪が手に食い込んで、血が垂れた。

「……坂田銀時、私はお前を許さない。」

カロリーメイトに水は必需品（後書き）

『オリキャラプロフィール公開!!』

銀時「今さらア!? ってかなんで敵のプロフを俺らが発表しなきゃ
いけねーんだよ!!」

新八「当の本人も出てきませんしね…。」

神楽「今回一行しか出てなかったアル。作者フルボッコしに行くぞ。」

新八「今その話!? そんなこと言ったら二話分も置き去り状態の僕
と銀さん立つ瀬なくなるから!!」

銀さん「ボイコット決定!。」

ということとで作者が紹介します。

・白鳥梓しらとりあずさ

鬼兵隊機密工作ゼロ班実行長。銀時に恨みがあるようだが…? それ

如何。とりあえず女っ気少ない今回はお色気担当のつもり。

スリーサイズ？そんなもん決めてない！ただサイズはは夢がいつぱい詰まったDreamカップ。

特技はまた本編でおいおいと。

：こんなものでいいでしょうか？

梓の呟いた「さち」とは誰のことなのか！？それもいつかでできま
す。

次回は残酷表現入ります。ようやくここまでこれた…。まさか読了
時間25分もかかるだなんて…。

感想お待ちしてますっ！！

探検は永遠の男の浪漫（前書き）

前回のお話を見直して思ったこと。

部下、なんて怖いこと考えていらっしやるの!？

またオリキャラプロフで鬼兵隊隠密く略と訳のわからない部署？が出ましたが完全ねつ造です。実際にそんなものは原作には登場しません。神威が高杉のことを「シンスケ」と呼んでいる設定も同様です。

今回は残酷表現あります。注意!!

探検は永遠の男の浪漫

絶え間なく発せられる怒号、雄叫び。互いの武器をぶつけ合い、火花を散らす。

春雨が潜伏しているビルに夜明けと同時に真撰組が御用改めと乗り込んだ。罪状は江戸への不法入国。

人間の刀が異質の肌を切り裂き。天人の鈍器が脆い骨を碎き。壁に相手に自身の体に鮮血を浴びせていく。

その光景は讓夷戦争を思い浮かべさせるものであった。

「怯むなアアアアア！！所詮相手は人間！！力で押せ！！！」

「手加減入らない！！緩めたが最後死ぬぞ！！！」

さらに血が噴き出す。陰鬱とした鉄の臭いが狭い通路に充満する。そんな惨状の中。近藤、土方、沖田は敵を先行して切り裂き道を開き、走っていた。

「……わらわら群がりやがって。バズーカ一掃しやせん？」

「総悟くうううん！！こんな古い廃墟にそんなもんかましたら俺たちまで死んじゃうからね！？」

「冗談ですよ。第一置いてきちまったもんどうやって使うんですかい？」

「あ。そっか。いやあ、すっかり忘れてた。」

嫌な断末魔が起こる。土方が敵の脇腹から肩へと切り裂いた。

二つに寸断された肉体が血だまりに崩れ落ちた。

「口動かしてる暇があるなら手ェ動かせ!!」

「空気読んで下さいよ土方ふくちょー。」

「そうだよトシー。」

「何の空気だよ!!……で近藤さん俺らは何処に向かってんだ?」

「もちろん上階だ。おそらく上には第7師団長神威がいるはず、たぶん、おそらく……。」

「局長がそんなに弱気でどうすんでイ。まあ馬鹿と煙と大将は上に行くのが定石でさア。」

「なら敵に気づかれる前にさっさと……。……。……?」

「どうした。」

「今……。」

土方の目は確かに捉えていた。

見慣れた感のする、白い影。

そして理解すると同時に向かっていたとは違う方へ駆けだす。敵陣の中一人になるのは自殺行為である。駆け出した理由が分からないながらも近藤と沖田は土方を追いかける。そして追いついた先にいたのは。

「やっぱりテメェか万事屋……!」

立っていたのは坂田銀時と志村新八の2人だった。

新八は追い付いてくるのに必死だったのか、肩から息をしている。対照的に悠然と立つのは銀時。真っ赤に染められた床と対照的に銀

時の髪は白く煌めいていた。
場違いにのんびりと沖田の声が伸びる。

「旦那ア。こんなところに何しに来たんです？」

「……探検？」

「んなわけあるかああアアアアアア！」

探検は永遠の男の浪漫（後書き）

「作者妄想設定」

銀時 「何コレ？ また変な企画始まってんぞ。大丈夫かこの小説。」

神楽 「私に聞かれても困るアル。作者の頭の中に聞いてヨ。」

新八 「と、とりあえずこのコーナーは作者が頭の中のみで考えられた痛い妄想を発表しようというものです。」

銀時 「作者はMか？」

神楽 「本名にはM入ってたアル。」

新八 「個人情報言わないそこオオオオオ！！」

神楽 「じゃあさっさといくぞー。『国立大江戸大学物語』」

銀時 「なんだそりゃ？」

新八「銀さん、桂さん、坂本さん、高杉さんの攘夷4人組が現代の大学生として活躍する話だそうです。」

ここまでひっぱって続きは次回へ！！

お気に入り登録がまた増えてました！ありがとうございます。

一人っ子と兄弟いる奴の壁は厚かったり薄っぺらいもんなだよちきしょー（爺

最近ゲリラ豪雨や雨で気温が下がっていますよね。節電には最適な気温です。

最近書いていて思ったのですが、どうでもいいことを書き過ぎて文章が長くなっている気がします…。だれかおたすけー。

ちなみに今回は残酷表現ありません。

一人っ子と兄弟いる奴の壁は厚かったり薄っぺらいもなんだよちきしょー

爆音と鏑迫り合いの甲高い音がこだまする。

当然探検でこの場にいた理由をごませるわけもない。土方らは手短な部屋に一時的に避難をし、銀時たちの話を聞くことにした。拷問といった方がいいのだろうか。そこは読者にお任せしよう。

しかし案外簡単に銀時は理由を話す。ここで時間を取っている場合ではないからである。

神楽が春雨に誘拐されたこと。そしてその手がかりを求め、真撰組の奇襲の混乱に乗じこのビルに忍び込んだこと。けれど。

「しかし分かりやせんね。どうして春雨の幹部クラスの神威が怪力チャイナを誘拐する必要があるんですかねェ。」

「もしや……。チャイナさんを人質に海星坊主殿をおびき寄せるためか？」

「アイツはそんな大層なこと考えるタマじゃねー。第一あのハゲおびき寄せてどうすんだよ。ハゲにはなにか超時限特殊能力なんかが宿ってんの？ハゲ菌でも採取してばら撒く計画でも立てるつもりですかコノヤロー。」

「んなわけあるわけねーだろうが！！」

「神威もチャイナも夜兎族だったよな。それが何か関係あるのか？」

「えっと、それは……。」

「多串君もしつけーなァ……。」

「どうなんだ。」

「……アイツは神楽の兄貴だよ。」

さすがに神楽と神威の血縁関係を言うことは洩った。

「しかし……そうなる。」

「ああ。もしチャイナ娘がこちら側に付いたら厄介だな。」

「ちょ……そんな言い方ないんじゃないですか！？ 神楽ちゃんはそのことしたりしません！！」

反射的に大声で言い返してしまう新八。

土方や近藤の言葉が新八に突き刺さる。今までの神楽を見てきていて、人を傷付ける側に立つかもしれないと言っているのである。

そんな新八のおでこに沖田のデコピンが炸裂する。

「あでっ……！？」

「そう熱くなりなさんな。そういう可能性も捨てきれないってことでさア。」

「安心してくれ新八君。俺たちだってチャイナさんが進んで春雨側に付くとは思っていないよ。」

「危惧してんのは意思とは関係なくあっちに付いちゃうことだ。例えばテメェらをネタに脅されたりな。」

土方がついと銀時らに視線を向けた。銀時は相変わらずの目のまま耳垢をほじくっていたが、隣の新八は青ざめていた。そんな可能性は頭に無かったのだろう。

小さくなった煙草を地面に落とし足で踏み消す。そして新しい煙草に火を付けた。短く小気味いい音がライターから発せられる。

「ならチャイナさんを救い出すのが1番だな。そうすれば春雨や神威の動きもある程度わかるだろうし、攪乱も誘える」

「まあ脅される前にこっち側に連れてきちまえばなんら問題ねえわな。」

「そういやこないだチャイナに公園で気持ちよく寝てるとこ叩き起こされたんだっけなア。その復讐まだしてねエや。」

「それはサボってたオメエが悪いだろうが。」

そう、その言葉は違えど。真面目にを告げている者もいれば。遠回しに表現している者もいる。しかし言いたいことはただ1つ。神楽を救出する。

その意思表示である。

「そうと決まったら早く最上階に向かうか。神威に会えば闇雲に探すよりチャイナさんの居場所がわかるだろう。」

「そういうことでさア。足、引っ張らないでくださいよ旦那。」

「いつまでも腑抜けた面してんじゃねえよ。さっさと行くぞ。」

「近藤さん、土方さん、沖田さん…。ありがとうございます!!」

「…別に頼んでねえんだけど。」

銀時はそう悪態をつきつつも。真撰組と共に同じドアをくぐった。

一人っ子と兄弟いる奴の壁は厚かったり薄っぺらいもんなだよちきしょー(後

「国立大江戸大学物語」とは？

坂田銀時。桂小太郎。高杉晋助。坂本辰馬。この4人は国立大江戸大学に通う2年生。時にバカやったり、時にシリアス空間作ったりしちゃったり。そんな青春物語。
ちなみに

桂…日本文化学部古典文学学科

坂本…商業学部外交学科

高杉…心理学部人間関係学科

銀時…調理学部製菓学科
です☆

銀時「ちよつと待てエエエエエ！！何でオレだけ専門学校系なんだよ！？ネジ飛んでるズラともじゃはどうしてまともなわけ！？てか☆ウゼエエエエエ！！！！」

新八「僕に聞かれても知らないですよ。にしても高杉さんのこれって…。」

神楽「人間関係作るのは苦手そうアル。染みつきました子と変態しかいなかったら必然の結果ネ。」

銀時「これは流石に文章にはしねエよな…？」

新八「ここまで考えて力尽きたそうで、短編にもする気もさらさら
ないそうです。」

神楽「きつとここに書きだしといて、後から「これをもとに書いて
もいいですか？」って言ってくれるのを待つ策略アル。友達いない
作者の無駄な努力ヨ。」

新八「自分が出てないからってそう毒吐かないの。」

銀時「友達いないってところは否定しないのな。」

新八「ちなみに最初のお話は孤立した館で起きる殺人事件から始ま
るそうです。」

銀時「なぜそこに着陸ウウウウ!?!」

神楽「ぐーたら大学生は名探偵に題名改変するヨロシ。」

自分、友達はいますよ?
ちなみに高杉の学科は某大学に本当にあります。

ここまでくだらない文章読んで頂きありがとうございました！

いきなり昔のあだ名はいろいろと恥ずかしい（前書き）

最近飼っているペットが可愛くて仕方ないです。萌え死にしてみよう……！！↑ただの親バカです。はい。

というわけで、本編をお楽しみください。

いきなり昔のあだ名はいろいろと恥ずかしい

斬って斬って斬り倒して。通行の障害となるものはすべて。目的の邪魔となるものは全員。

天人の波を真っ向から真撰組と万事屋の共同戦線が突き進む。そしてそろそろ屋上まで近づこうかという頃、ようやくたどり着いた。そこは建物の部屋にしてはやけに開けた場所であった。建設途中であったのだろうか、壁や柱はあまりない。壁紙も貼られておらず、ざらついたコンクリートが剥き出しである。その乱雑な空間の中央に、アイツがいた。

「…神威。」

「ようやく見つけましたね銀さん。」

「フン、写真で見たとおり、フザケた面してんな。」

「あの隣のでっかいのは誰なんですかイ？」

「第7師団の副団長に任に付いてる阿伏兔じゃないのか？」

敵が目の前にいるにもかかわらず、それぞれ好き好きに喋り出す。しかし攻撃しないのではない。できないのである。いきなり駆けだすのは危険すぎる。男の勘がそう言っていた。事実、悠然と立っている2人に隙がなかった。

「…あれ？あの黒い3人誰？阿伏兔。」

「あーあれだ。今このビルに来てる真撰組の奴らじゃないのか？見たところ隊長格みたいだが…。」

「ふうん。まあ誰でもいいや。弱そうだし。」

「うおおおい！！聞いてきたのそっちからだろ！？」

神威、阿伏兎も呑気な会話をしている。しかし銀時たちが妙な緊張の中話していたが、この二人の間にはそれは無い。

ひとつ。ひときわ大きく爆音が爆ぜた。

神威は笑顔のまま銀時を見据える。銀時も同様に真正面から視線を受ける。

「にしても…やっと会えたね銀髪のお侍さん♪」

この言葉に土方は違和感を感じた。

神楽と神威は兄妹の関係であることは確かなようである。だが万事屋と春雨は接点が無かったはず。なのにどうして1度会ったような言い方を奴はしているのか。

これは真撰組が吉原の一件を正確に把握していなかったためである。その時、吉原桃源郷に君臨していた夜王を銀時が倒し、解放したなどということは知るわけもない。

だがそんな違和感を感じたことなど直ぐに吹っ飛んでしまった。

「俺は別に会いたか無かったがな。」

「でも俺はおにーさんにずーっと会いたかったよ。…それともさ、白夜叉って呼んだ方がいい？」

笑みが、邪悪な気を纏った。やれやれと呆れる大男。

3人の驚きの眼差しが1人の男に向かう。

少年は焦りと不安で信賴している人に視線を移してしまふ。
そして、無反応に青年を見据える侍がいた。
また一つ。火薬の花が散った。

いきなり昔のあだ名はいろいろと恥ずかしい（後書き）

「万事屋猫を飼う」

新八「前回の続きで、作者の妄想とねつ造と空想とで構成された痛いお話設定を発表したいと思います。」

銀時「いやいやいやおかしいから！ただネタないだけだろ！？って上の何！？定春いるうえに猫までいたら万事屋どうするわけ？非常用の食糧か！？そうなのか！！？」

神楽「とりあえず何か動物を出したかっただけみたいアル。」

新八「作者的には兎が良かったみたいです。マイナーという理由で止めたみたいですけど。」

銀時「それが理由うううう！？神楽の過去バナで出たからとかじゃないのおおおお！！？」

新八「話の出始めは3日だけ動物を預かってほしいという依頼人。そして引き受ける万事屋。」

神楽「悪戦苦闘する育児。」

銀時「育児じゃないからね!! 飼育だからね!!」

新八「おわり。」

銀時「決まってないのかよオオオオオオ!!!!」

神楽「所詮4流が考えた話だから仕方ないネ。」

何で…本編との温度差がここまで広がっているんでしょう。
それが目的だったんですけれど…。何か違う気がするこの頃。
私は何処から道を誤ったのでしょうか？
次回も本編はここと違い完全シリ阿斯路線です。

始まりは唐突に（前書き）

昨日中学時代の友達とカラオケに行ってきました！自分を含め3人で8時間半歌いました。喉が痛いです。

またまた余談ですが。この小説内で神威が銀時のことを呼ぶ時。

- ・ 銀髪のおにーさん
- ・ 銀髪のお侍さん
- ・ 侍のおにーさん
- ・ お侍さん
- ・ おにーさん

とバリエーション？たっぷりです。幻想です。妄想特急便です。これはいまいち私めが、神威が銀さんを「ギントキ」と呼ぶ想像がでないためです。ちなみに「お兄さん」ではなく「おにーさん」というのも完全に自分の妄想です、はい…。

銀時「何回妄想妄想強調してんだよ。その言葉一つで何でも解決できるとってんじゃねーぞオイ。」

始まりは唐突に

「チッ。桂や高杉と繋がりがあるはずだ。万事屋テメエ…やっぱり攘夷戦争に参加してやがったのか。」

土方は忌々しく吐き捨てるように銀時に投げかけた。投げられた当の本人は土方に目もくれず、神威だけを見据えていた。その行為が余計に土方に油を注ぐ。

「おいメガネ。お前このこと知ってただろ。」

「え…。そ、それはその…。」

「トシ。今は新八君を問い詰めるより優先する事項があるだろう。」

「…。」

銀時から返答を得られなかった土方は新八へと矛先を変える。しかしいつになく冷静な近藤が諭す。もやもやとした心境のまま、土方は黙った。だが、もどかしく苛立ちを募らせているのは土方だけではない。

「…俺の呼び方なんて関係ねえだろ。神楽を何処やった。」

地を唸るような低い声。

そんな銀時を見、神威は頬を膨らます。銀時の態度が不満のようである。

「ちえっ。少しぐらい再会を楽しんでくれたっていいじゃん。…入
っていいよー。」

突然誰に向かっていつているのかわからない言葉。それが合図だっ
た。

神威の後ろのあった、扉が備え付けられていないためぽっかりと空
いた入口。そこから人影が滑り込む。その影は3人。

うち二人は天人であり、服装が揃っているところを見ると下の階級
の団員であるようだ。そしてその2人が両脇に立って引き連れてき
たのは。

「神楽ちゃん!!!」

新八が思わず叫ぶ。

そう、神楽だった。後ろ手に縛られているだけで見た目、これとい
った外傷は見られない。しかし彼女に意識は無く、その顔には血の
跡が残っていた。

神威の部下は物を扱うように乱暴に床へと神楽を転がす。見張りの
ためか、脅しのためかその真白い首筋に槍を付きつけた。それでも
なお、神楽は起きない。

自身の隣でそんなことが起きていても神威は視線も向けない。ただ
笑って立っているだけ。

「もっと磔？みたく仰々しく吊るしてみても面白かったんだけど、

今不景気だしさー。それに――」

一陣の風が薙ぐ。だがそれはたった1匹の兎に止められた。
渾身の力で振るわれた銀時の木刀を、神威は軽々と片手で受け止めた。

「そこまですなくてもおにーさんはこれで十分本気になってくれるでしょ？」

本来の戦いはいつも突然に。何も合図も前触れも訪れずに始まる。

始まりは唐突に（後書き）

楽屋裏コーナーは本日はお休みです。

戦闘表現は難しい…！

名字は分かってもなかなか名前が思い出せない（前書き）

お気に入り登録してくださったありがとうございます！！

感想も本当に元気が出ました！これで頑張ってテストに挑めます。

…あれ？何か違う気がする…。

それでは本編へどうぞ。

戦闘シーンって、難しいですねえ…。

名字は分かってもなかなか名前が思い出せない

ギリギリと拮抗する力。銀時も神威も微動だにしない。
そんな状況でもあくまで神威は自分のペース。

「阿伏兔おー。俺銀髪のおにーさんでいっぱいだからさあ。
後の残り物、片しといてくれる？」

「嘘つけ！殺る気にだしや絶対出来るだろうが、このすつとこどつ
こい！！」

「何余裕出してんだクソ神威！！」

木刀を後ろに一瞬引き、横に振り抜く。神威はしやがみ回避する。
桃の髪が一筋飛んでいく。そこから神威は足払いに繋げるが銀時も
木刀で避ける。膠着状態から一気に常人離れした一進一退の攻防に
切り替わった。

「まったくあの戦闘馬鹿め…。」

あの様子では何を言っても神威は聞かない。そう阿伏兔は諦め、新
八と真撰組を見据える。

「まあそういうこったあ。1人相手に4人はつらいもんがあんだけ
どな。てか俺1番年上なんですけど？年寄りを労わる精神が売りじ
やなかったの地球って。」

「アンタの年齢なんてこっちは知らないな。」

「第一、こんな無精髭巨大天人に敬老精神なんて微塵も湧かねえよ。」

「そうそう動物愛護団体じゃねえんで、勘弁してください。にしても良かったなメガネ。オメエも頭数に入ってるらしいぜイ。」

「…あなたたちは入れてくれなかったんですね。」

やれやれと傘を担ぐ阿伏兔。

「…アンタら名前は？」

「そんなこと聞いて何になる。」

「戦い前には聞くのが礼儀ってもんだろ。」

その言葉を聞き、少し近藤は驚きを感じる。天人が武士道を知らないだろうが、無意識のうちにわきまえているとは。

「…そうだな。俺は真撰組局長近藤勲と申す。」

「同じく真撰組副長土方十四郎だ。」

「新撰組1番隊隊長沖田総悟でイ。」

「万事屋従業員志村新」

「やっぱり隊長格か。俺は第7師団長の阿伏兔…っってもう知ってたな。」

「ちよつとオオオオ!!! 何で僕だけ抜かすんだよ!?! 礼儀はどこに行ったんだよ!!!」

「…テメエが? あっちで戦ってる方が団長じゃないのか?」

「あー。いろいろあってなア。今はアイツが提督で俺が団長なんだ

よ。」

神威の暗殺計画。鬼兵隊いや高杉との協力関係締結。意外と重大なことをいろいろの一言で終わらす阿伏兔であった。

そして自己紹介も新八を除き終り、それぞれの獲物を構える。

阿伏兔は傘。真撰組は刀。新八は木刀。

「無駄話もこの辺にしてこっちもそろそろ始めやせん？」

「そう…だな！」

土方は右。沖田は左に向かって駆け出す。

そして阿伏兔は袈裟がけに振りおろした土方の刀を傘で叩く。

沖田の逆風はくい止めない。見事に左腕を斬ったそう思ったが、手ごたえがまったくない。

そこにあるはずの腕は既になかった。

「なっ…!?!」

「残念。そっちはもう無くてねエ。」

巨大な傘が沖田に向かって振りおろされる。しかし近藤が軌道を変え傘は沖田の真横の床へと吸い込まれた。そして阿伏兔は何を思ったか、誰もいない空間に蹴りを繰り返す。

「うぐ……!」

しかし意味の無いと思われた足技は新八に直撃する。

「新八君!!」

新八はそのまま線を地に刻み床を滑ったが、近藤がそれを支えた。

「下手にお譲ちゃんを取られるめんどいんでね。」

瞬間。

宙に一粒。何かが飛来した。

名字は分かってもなかなか名前が思い出せない（後書き）

銀時 「いやー。俺のかつこいいところやっとなアー。」

神楽 「銀ちゃんずるいアル。私も混ぜてヨ。」

新八 「そういうことは作者に言ってくださいね。…あれ？」

神楽 「噂をすればなんとやらアル。作者からお手紙ネ。」

銀時 「何を書いてあんだ？ぱっつあん読んでくれや。」

神楽 「てことでぱっつん。さっさと読むヨロシ。」

新八 「面倒なことはすべて僕行きかよ！！神楽ちゃんぱっつんて何！？別に前髪そこまでカットされてないんですけど！！！」

銀時 「ただの変換ミスだろ？気にすんなよぱっちん。」

新八 「どさくさにまぎれてアンタも言ってんじゃねえよ！！もはや

ただの効果音だろソレ！！！！……話が進まないんで読みますよ。」

作者『ご迷惑をおかけして申し訳ありません。学校が9月からテスト開始なので、更新がさらに不定期になります。パソコンが開けた時に余裕がある時のみ更新させていただきます。3連休には復活できる（予定）です。』

銀時「あああああ！！！？せっかく俺が大活躍してんのに休むだあ！？んなこと許されると思ってんのか！！！」

神楽「そうヨ！でも銀ちゃんまだましアル。私なんてずっと縛られて冷たい床に転がされるだけでやること無くてちょー暇ネ。」

銀時「予定って何！？またここでもぼやかし作戦か！！！」

新八「追試になったらまた期間が延びるらしいです。」

神楽「何とかしろヨぱっきん。」

銀時「そうだぜ、ぱったん。お前のダメガネパワーで作者の残念な頭を救ってやれよ。」

新八「僕に言うな！！ダメガネパワーって余計縁起悪いわ！！あと
…いい加減名前で呼べよテメーらアアアアア！！！！」

近いうちにまたお会いできると思いますが、とりあえず更新ペース
が遅くなるのは確実です。ご迷惑おかけします。

普段遅刻する奴に限って早く来ると偉そうな口を叩いてる（前書き）

面白いくらいにレポートが終わらないです…。

本編は少し短めです。

普段遅刻する奴に限って早く来ると偉そうな口を叩いてる

宙に舞った何かは天井に命中した。

途端、轟音と共に大量に水が降り注ぐ。まるで土砂降りだ。

「のわぁ!! なんだぁ!?!」

背が高い分、天井にも1番近いためろに水を被る阿伏兔。遠くからは「暑いからちようどいいや」なんという呑気な上官の声。しかしそんな中でも見逃さなかった。

近藤が自身の懷に潜り込もうとするのを。

「甘いな!!」

近藤の向かって回し蹴りを振りおろす。近藤は自身の腕と刀の腹で受け止めたが、完全には防げず水しぶきを上げながら地を転がっていく。

「近藤さん!!」

そう叫びながら土方は阿伏兔を斬りつける。肩をかすめたがそれほど傷を負わせることはできない。阿伏兔の傘が高速で飛ぶ。体を捻りなんとか避けたが、濡れた土方の頬から鮮血が舞った。

「まったくスプリンクラーかよ…。」

頭上から水が降ってきた原因はスプリンクラーであった。スプリンクラー自体は既に止まっている。足元を見ると水浸しになってもう使えそうにないライターが落ちていた。

土方が自分の手持ちのライターを火災報知機に向かって投げたのである。結果、「火災」と誤報した機械が「消火」をするためスプリンクラーが作動させたのである。

「こんなもん奇襲の奇の字にもなって…あれ？」

阿伏兔の視界には痛めた腕を抑えている近藤。臨戦態勢を維持している土方。

そして、未だ昏睡している神楽を護る沖田と新八の姿。

後ろを見ると頸動脈を絶たれ絶命している部下と、泡を吹き気絶している部下2人を確認できた。

「阿伏兔オ。何きちんとひっかつかてんのさ。」

茫然とした阿伏兔は神威ののんびりとしたつつこみに反撃することもできなかった。

普段遅刻する奴に限って早く来ると偉そうな口を叩いてる（後書き）

『このころ舞台裏では』

もしこの話がドラマ撮影の一部だったらという妄想の上のさらに創作のこゝナです。

山崎「…いつまで水出せばいいの？」

廃ビルのため。水道が通ってないので地味にタンクにつないだホースから水をばらまく山崎でした。

山崎「スタッフにやらせろよ!!」

次回も少し短めです。

水も滴るいい男の末路はただの鼻たれ小僧（前書き）

いつか書く短編の投票始めました。詳しくは活動報告へ。
楽しみにしている方はいないと思いますが、楽屋コーナーはお休み
です。

水も滴るいい男の末路はただの鼻たれ小僧

『行け。』

小さく。音も発さないぐらい。そう近藤が呟いたのが合図であった。土方がライターを天井に投げ。スプリンクラーが作動したと同時に沖田と新八が駆け出す。そして近藤がその2人に注意を行かせないに阿伏兎に接近戦を仕掛けた。

近藤がおとりになっている間に沖田は神楽に槍を向けていた下っ端の首筋を一瞬で裂く。断末魔は叩きつける水音で消える。新八も残りのもう1人の横っ腹に木刀を振り抜く。死にはしないがしばらくは動けないだろう。そして神楽を奪還。そして近藤らのいる安全地点まで引き返したのである。

透明な水と、どろりとした血が混じり合う。このフロアにいる全員が濡れ鼠状態です。髪から落ちる水滴がしきりに波紋を作った。

「…わざと見逃したろ。」

「何が？」

「しらばっくれんな!!」

白い着物が浮遊する。

銀時が神威の脳天めがけて木刀を振りおろす。神威はいとも簡単に軌道から外れ、銀時の左足を掴み背中からコンクリートの床にたたきつける。

「が……!!」

「別に返さないとはいってないじゃん。むしろ渡す手間が省けて丁度良かったって感じ。」

意味不明な言葉を言っただけのける神威。しかしそれが嘘なのかはたまた本心なのか見抜くすべはない。その顔はつねに笑顔であるからだ。そして神威の話にガオウと喰ってかかる人が1人。

「気づいてたなら一応止める努力ぐらいしろ、すつとこどっかい！」

「自分の失態を上司に擦り付けんなよ。引っかかるアンタが悪いんでイ。」

「普段から擦り付けてるオメエが言うな！」

「土方さん苦労して、」

かち。かち。かち。

「え……？」

土方に同乗しようとした新八の声が奇妙に途切れた。新八の耳におかしな音が届いたからである。そして今も聞こえる。

かち。かち。かち。

それはとても規則的で。時計の秒針のように鳴り続けていた。しか

時計など廃墟にあるわけがないし、この場にそんなものをつけている者もいるとも思えない。真撰組の各々で作戦のため時刻を見るかもしれないが、戦い前には外すであろうし。第一今まで近くにいてそんな音は聞こえなかった。

ならば、何処から？

土方や近藤、沖田もそんな音に気がついたようだ。はっ、と声ではないが気づくような息遣いが土方から聞こえる。ぐらりと体の向きを変え、阿伏兔から神楽へその視線が移動した。

すると何を思ったか、神楽の胸ぐらをつかむ。そして服の上部のあたりを開いた。ただでさえ開き気味の瞳孔がさらに広がる。他の3人も息をのんだ。
そこには。

「これは……！？」

神楽の胸には謎の機械が根を張り、埋まっていた。

水も滴るいい男の末路はただの鼻たれ小僧（後書き）

話が怪しい雲行きになってきました。

今回は時間がないのでこの辺にて失礼します。

体でも心でも、痛すぎると何も感じない（前書き）

サブタイトルがとても不吉な感じを醸し出しています。
そう、今回ある人がまさかという展開に……！
残酷表現あります。

では本編へどうぞ！

体でも心でも、痛すぎると何も感じない

「神楽に何しやがった!!」

そう問い詰める銀時は左足を引きずっていた。神威に掴まれ、思い切り振りまわされたために痛めてしまったのだ。息が荒く揺れるその背からは、ぱらぱらと瓦礫の破片が落ちてゆく。

神威はそんな銀時を見、より一層笑う。それは爽やかとは言えない、邪悪な笑み。

「別にまだなあんにも。まあもうちょっと時間がたてば面白いことになるんじゃない?」

神威と阿伏兎以外の全員にぞくりと寒気が走る。新八が冷や汗を垂らした顔でおそるおそる言葉を紡ぐ。

「まさかこれ……時限爆弾なんじゃ。」

「まあそういうもんかな♪ね、阿伏兎。」

「何でこの状況で俺に話振るんだよ……。」

「外す方法は無いのか!」

「さあ?だってそれ作ったの俺じゃないし。付けたのはそうだけど。あの時の神楽は笑えたなア、ぶるぶる震えちゃてさ。」

居合抜きのように鋭く木刀が神威を捕える。神威は傘で防いだが、その傘は粉々になって柄だけになった。

「ありゃ？」

だが、銀時の攻撃はそれだけで終わらなかった。

神威の横面に銀時の拳がめり込む。声もなく、しかし踏鞴を踏みながら吹き飛ばされることは無かった。

そしてその顔は先ほどよりもたちの悪い笑み。ようやく本気を出してくれてうれしいと云わんばかりの。

完全に面白がっている。

神威を見てそう、新八には思えた。

そして同時に怒りが沸く。

血を繋がっているはずの妹。そんな妹を傷つけて、あまつさえ時限爆弾なんてもものをつけて。罪悪感どころかゲーム感覚に楽しむだなんて。

許せない。

神楽を支える手にも木刀を握りしめている手にも力が入る。

阿伏兎も戦闘を再開した。近藤、土方がそれに応戦し沖田が自分と神楽を守っている形である。だが2人とも動きが冴えず、小さな傷を体にいくつも付けた。神楽に取り付けられたもの。それに気が散っているのである。

剣戟の中。新八の腕の中で、神楽がかすかに身じろぐ。

薬の効果が切れたのか。騒音に目が覚めたかは分からないが。ゆるゆると目を開き始めた。

生きている。そう新八は安堵した。

「神楽ちゃ——」

かちっ。神楽が目を覚ますと、ずっと鳴っていた機械音が鳴りやんだ。

そして新八の耳に音が聞こえなくなったと同時に、まるで真っ赤に焼けられた鉄で殴られたような。言い表しようもない衝撃が腹部に走った。

「え……………」

開いた神楽の瞳は虚ろで空っぽ。何も見ていない。その顔には何の感情もみられない。

その手を真っ赤に染めながら……。

無機質な少女の手は少年の、新八の腹にめり込んでいた。

体でも心でも、痛すぎると何も感じない（後書き）

銀時「……ぱつつぁん。おつかれ。」

新八「……あの、僕なんかすごいことになってるんですけど。いや、シリアスの部分がようやく出たのはいいいんですけど。」

神楽「次回はもっとパワーアップするみたいアル。」

銀時「マジでか。」

新八「次回、残酷表現が大半占めちゃってますね。」

神楽「ちなみに今回の話で一番大変だったのが神威のルビ入れらしいアル。」

新八「そこオ!!?」

銀時「あと今回の話で一番理想通りに書けたのが神威と俺の戦闘シーンだとき。」

新八「……作者出てこいやアアアアア！……！」

新八がキレたようです。当然ですねごめんなさい。でも新八をないがしろにしてる訳ではないです。そこはわかっていただきたいと思います。

しかしまた怒られそうなおこします。新八にじゃないですよ？

けど、そのキャラのファンの人からもフルボッコにされそうだなあ

……。　（遠い目）

感想は随時お待ちしております。

鉄の元素記号はFe（前書き）

まだ前回の台風の傷が癒えていないのに台風15号。皆さま気を付けて下さいね。川には近づかないように。

えー追試がおそらく1つ確定した旭日です。

難しいテストを出す先生が悪いんだい。テストという大事なものを前々日に急いで作るからいけないんだい。責任転嫁です。出来なかった自分が一番悪いに決まっています。……はあ。

今回意外とスムーズに書けました。

残酷表現注意です。

鉄の元素記号はFe

銀時は、見てしまった。

ずっと護りたい。絶対に護ると決めた。そのうちの2人の少年、少女が。

何か、壊れた音が聞こえた。

神威を思い切り木刀で叩き、そして渾身の蹴りを放った。

その時、神威の背後に妙な光景が見えた。自分以外、真撰組の奴らも神威も阿伏兔も戦いに集中し注意をを向けていないため気づいていない様だ。

銀時が最初に目てしまったのは何の因果か。

新八が驚いたように神楽を見ていた。その神楽は背を向けているためどんな顔をしているのかわからない。

そしてその新八の腹は真っ赤に染まっていた。

攘夷戦争前。

戦争中。

終戦後平和になってからも。

ずっと、ずっと見たくないもの。自分はまだいい。けれど仲間や大事な人から流れているのは見たくなかった。

神楽の真紅の手がゆっくりと引き抜かれる。鮮血が飛び散った。灰色しかないコンクリートに赤色がびちゃびちゃと滴り、濁った光を放つ。

「あ……………!!」

新八の口の端に血が伝う。小さく喘ぎ。そしてそのまま前のめりに傾いでいく。

「新八イイイイイイイイイイイ!!!!!!」

銀時が叫んだのと新八が力なく倒れたのはほぼ同時。

一番近くにいた沖田が初めて後ろで起こった惨状に気づく。

だが、新八の状態を確認する時間など彼に与えられなかった。

今まで目の前にいた神楽が、沖田の背後にいた。気配を察知した沖田は刀を振向きざま後ろに陣形をとる。同時に沖田は壁へと吹っ飛ばされ、叩きつけられていた。

「……………がっ……………!!」

背中が鈍い痛みを訴える。頭も強かに打ち、波のように激痛が押し寄せる。

そして彼女がゆらりと立つ。

その足元には沖田の手から離れた彼愛用の刀。神楽が柄に手をかける。ちゃんと床と刀身がこすれる音がする。

そんなことは一瞬。刀は主である沖田の左太腿に突き立てられた。

そして神楽は徐々に刀を回し始める。

「あ……。っ————ああ!!!」

鋭く、熱い尋常ではない痛みが沖田を襲った。耐えきれずに音ならない声をあげる。血が飛来し、そこかしこにへばりついた。

半分ほど回しただろうか。刀は沖田の足から引き抜かれ、血に染まった刀身が顔を出す。

出血は収まるわけはなく、さらに加速する。ほんの少しも経たないうちに立派な血の池が作り上げられた。

その池の中に沖田の体は沈んだ。

「「総悟オオオオオオオオ!!!」」

土方と近藤の二つ分の叫びがこだまする。

ゆっくりと神楽が振り向いた。

右腕と持つ刀にはまだ、真新しい血が滯ることなく滴る。ピンク色のチャイナ服にどす黒い色の血飛沫が張り付いていた。顔には何の表情も浮かばない。まっさらな瞳は何を見ているのか。

その顔に新八、沖田の返り血を浴びて。

鉄の元素記号はFe（後書き）

ということで沖田がえらいことになりました。

銀時「今じゃ●プで真撰組活躍してるのにやっちゃまったな作者。」

神楽「新八もやっちゃまってるアルな。」

新八「あの神楽ちゃん。他人事のように言わないでくれる？」

沖田があんなことになるのは最初から決まっていた。沖田ファンの方大変申し訳ありませんでした。また新八が誰かに刺されると言う展開が思いついて、この小説を立ち上げたようなものです。ごめんメガネ。

ここでお知らせ。現在活動報告で募集している短編投票ですが。締め切り日を指定するのを忘れていました（笑）

10月8日土曜日0時に締め切らせていただきます。

投票お待ちしております。

もちろん感想も随時お待ちしております。

目薬の用意を、砂埃は目に染みるぜ（前書き）

なんだこのサブタイ。そして第一声がこれですかい。

ちなみに執筆中のタイトルは「建物破壊は素手でやるもんじゃない、重機がやるもんだ」でした。

どっちもなんだかなあ……と思わないでもないです。

途中原作の言葉が入ってますが、作者はコミックスを買っていないので合っているかとても曖昧です。

もしかしたら忘れたところに台詞が増えているかもです。

では本編どうぞ！

目薬の用意を、砂埃は目に染みるぜ

——バーさんがいなくなったら助かったって何にも嬉しくないアル。銀ちゃんがいなくなったら生きてたって何にも楽しくないアル！！

——お登勢さんはあれ位じゃ死なない！！僕らは死なない！！アンタは死なない！！何故ならアンタが僕達を護ってくれるから！！何故なら僕達がアンタを護るから！！

俺が護りきれなくてばーさんが凶刃に倒れた時。

俺は自分を見失いかけてた。道を間違えそうになっていた。

だけどアイツ等は正してくれた。手を差し伸べてくれた。

なのに。そんな2人を。

俺はまた護ることができなかった。

「新八、神楽っ…！」

「何処見てんの？」

後ろから声。銀時は神威に背中を勢いよく蹴飛ばされた。足がもつれ、地を舐めたが、そんなことはどうでもいい。早く、新八と神楽のもとへ。

木刀をふざけた笑みを浮かべている奴へと振り抜く。

「邪魔すんじゃないエ…！！！」

「…。」

「なっ…！？！」

だが、完全に振り抜かれることはない。

目の前にいたのは神威ではなく。神楽だった。彼を庇うように、少女は血濡れの刀を持ち銀時の前に立ちふさがっていた。

銀時の右肩から鮮血が吹き出す。

銀時は木刀を振れない。振れるわけが、なかった。

だが神楽は躊躇なく銀時を斬った。沖田から奪い取った刀から新たに血が滴る。

「ぐ…。神楽、何で…。」

苦しく、哀しげな銀時の訴えに神楽は何も答えない。

ひどく無感動に、刀を持つ手とは逆の拳を持ち上げる。それをためらいもなく銀時に向かって振りおろした。

銀時は体を捻りなんとか回避する。神楽の手加減のない力はすべて床に打ち落された。

巨大な罅が走る。神楽の力に無人の時間が長かったビルが耐えられなかったのだ。そして大きな地響きと轟音を鳴らす。埃が舞い上がり、視界を塗りつぶす。

それは瞬きの一瞬の時間であった。

銀時たちのいたフロアの半分がただのコンクリート片となって下の階に崩れ落ちた。

目薬の用意を、砂埃は目に染みるぜ（後書き）

TV視聴中の万事屋……。

新八「今日の『それいけ花野リサーチ!』は歌舞伎町なんですね。」

銀時「どうせなら結野アナ出せよ。あっちの方がそれこそ華があるだろうがよ。」

神楽「男の嫉妬ほど醜い者は無いアルよ銀ちゃん。」

新八「なんか聞きおぼえがある言葉なんだけど神楽ちゃん……。」

神楽「気のせいネ。」

銀時「なんか見覚えある店出てきたぞ。」

新八「本当ですね。って、芸能人御用達の店……?」

神楽「その割にこの店にお客いるとこ見たこと無いヨ私。」

銀時「だなー。現にコレ撮ってんの中の時計見つと……昼どきだろ？ やっぱ客いねェじゃん。『人に見られないから』御用達なんじゃね？」

新八「よく見えますね。銀さん……。」

この間テレビを見て思ったことです。

丁度家の近くを特集してまして。それで以前行ったことのあるお店が出てきたのですが……。

あまりおいしくなかったんですよコレが。そのときも有名だと聞いて食べにいったんですけど。でもテレビの中ではうまいうまいと言って食べている。

とても不思議でした。

それでちよつとその不思議を銀さんたちに消化してもらいました。

本編はどんどん暗くなっている中、後書きはこんな緊張感なくすみません。

こんな駄目駄目な作者への感想お待ちしています！

地味という欠点は時に武器になる（前書き）

穴に落ちた銀さんほったらかしで真撰組側の話です。

話がうまく切れず、1700字というお化け回に。携帯読者様、大変申し訳ないです。大

地味という欠点は時に武器になる

ぽっかりと空いた大きな穴。そこにいたはずの銀色の髪を持つ侍の姿が見えない。

「万事屋……!?!」

「おいおい、ガラ空きだぜ?」

「っ……!?!? くぁ……!?!」

砂埃が舞い上がる空間に視線を傾けた途端。阿伏兔の蹴りが飛んできた。びりびりとした衝撃が襲う。そして続けざまに重い傘の突きが次々と飛んでくる。

つうつと嫌な汗が流れた。今こうして戦っている間にも、沖田と新八の体から血が流れ続けている。早く応急処置でもしなければ命にかかわる。

だが、今この場にいるのは土方と近藤。2人で圧されている阿伏兔相手に1人で時間が稼げるのか……。

否、土方の答えは決まっていた。

「近藤さん。俺が――」

瞬間。爆音が耳を劈く。

放たれた砲弾は阿伏兔の顔を髪一筋分横に通り過ぎた。そしてコンクリートの壁を破壊する。

コンクリートに空いた穴から、青色の空が顔をのぞかせた。

「……随分タフだねエ、1番隊隊長さんよ。で、お宅誰？」

「——総悟！！それに」

「山崎！！？何でここにオメーが……。」

阿伏兔が見据える先にいたのは新八に応急処置をしている山崎退。
そして持っていないはずのバズーカ砲を携えた沖田だった。

「携帯が通じないから直接情報を伝えに来たんです！そしたらびっくりしましたよ。旦那はチャイナさんと戦ってるし、沖田隊長は倒れて新八君は危険な状態だし……。」

「それはわかったが……総悟、テメーは何でソレ持ってたんだよ！？直前に路地に置いてったろうが！！」

「あんな簡単に、土方コノヤローを葬れるアイテムを手放すバカが……何処にいるんでイ。」

「……そこまで話せるなら大丈夫だな。」

そう近藤が締めくくったがしかし、そんな事とは強がりであることは誰でもわかってる。沖田の顔は真っ青でその足からは未だ少量ながらも鮮血が滴っている。苦しげな呼吸も隠し切れていない。

だが、ここで想定外に山崎が加勢したことは真撰組側にとっては有利になった。これなら、まだ2人相手で阿伏兔と戦える。

土方と近藤があらためて刃を構えた。

そして大男はにんまりと笑う。

「おいおいまだやる気？勘弁してくれよ。おじさんもう年だからさ、きつついんだよ。」

「そんなこと言ってる場合か？アンタんとこの上司はまだやる気十分だったみたいだが。」

「そうなんだよ。まあ、後は若いもんに任せるわ。」

この言葉に近藤は眉を顰め、そして気が付く。

阿伏兔の奥に1人。誰かがいる。

煙がはれ、その誰かが姿を現した。黒を基調とした薄い着物に目立つ紅の羽織を着た女性。爆風にあおられた髪は先のほうだけにウェーブがかかる。

そう、白鳥梓であった。

たんと大きく跳躍し、神楽の開けた巨大な吹き抜けを超えて阿伏兔の隣に着地する。髪に留められた簪が美しい音を奏でる。

その姿、鴉というよりもまるで猫のよう。

「やっと加勢してくれる気になったのか？鴉のお譲さん。」

「別に加勢する気なくてよ？ちょっと変に体が固まって来たから動きたくて。やられてるふりも楽じゃないのよね……。」

「けっこう厳しいお言葉で……。」

よく見ると入口の近くにも人影を確認できる。神楽奪還の際に新八が気絶させた部下である。だがそこにはもう1人足りなかった。沖田が首を切り裂いて絶命させたもう1人。その場には血だまりがあるだけで死体が無い。

汗が一粒。コンクリートの床に染み込んだ。

「……今まで変装してたってか？」

「怪盗20面相も吃驚の技だな。」

「しかも……俺にやられたふりをまでしてくれるサービス付きですかイ？」

「ふふふ。私、変装術が特技なもので。上手でしたでしょ？」

「おい山崎。コイツ誰だ。」

「白鳥梓。通称『鴉』。……鬼兵隊の隊員です。なんでここに。」

山崎の言葉に皆、驚きの色を隠せない。

そんな様子を見て妖艶に口角を上げる梓。

「私のこと、知っていたこと称賛に値しますわ。けれど、春雨と鬼兵隊が手を組んでいたというは知らなかったみたいですわね。」

「まさかこの件に高杉も関わっていたとはな。」

「高杉様は何も知りません。私が独断で行なっていることです。」

梓は近くの瓦礫に腰掛けた。そして余裕のある顔で続ける。

「丁度いいでしょう。今あの提督の妹に何が起きているか。話して差し上げますわ。」

地味という欠点は時に武器になる（後書き）

銀時「今回オリキャラに続いてまさかのジミー君登場？いまさら地味な奴いらなくね。何のつけたしにもなんねーんだよ。刺身についでくるワカメぐらいどうでもいいーよ。」

新八「山崎さんに出番食われたからってやつあたりすんな！！あと刺身についでるワカメは口直し用でいるんだよ！！」

神楽「っていうか何でこの展開で地味男がいるアルか？」

新八「それは作者が説明するらしいですよ。」

実は山崎の登場はもっと後の予定でした。

しかし見せどころのなかった新八は倒れ、沖田も負傷し、残ったのは近藤さんと土方さん。相手はシラフの神楽ちゃんが手こずったあの阿伏兎。

近藤さんを治療役にしても、土方さん一人じゃきつくはないか？ということではザキ参上。

銀時「理由適当だなオイ。」

ちなみにオリキャラの特技は「変装」でした！

次回はいろいろと謎が解ける予感満載ですね！

俺に触るとやけどするぜって火遊びでもしてるのアンタ。そろそろ卒業したほ

読者様！お久しぶりです！！この連載を始めてからここまで間があったのは初めてです。

やっぱり追試でした。

そして本来のテストよりもパソコンの前に座っていないという不思議。最初からそうすればよかっただろうに。と頭の中からそう諭す声が聞こえる今日この頃です。

間があいたということで今回は増量キャンペーン！！題名も本文も増量しています。

ちなみに本編は2000字です。多いです。携帯で読む方毎度毎度すみません。

真撰組がメインの話はやたらめったら文字数が増えるというフラグが立ちつつあります。

俺に触るとやけどするぜって火遊びでもしてるのアンタ。そろそろ卒業したほ

「あれはね、鬼兵隊が秘密裏に開発していた機巧装置^{からくり}。機巧人形のように猫でも犬でも人間でも天人でも生物なら何でも操ることができる。加えて言うとな作用の機巧装置は現在提督さんが持っているわ。」

「操る……。だからチャイナさんはこんなことを。」

そう言葉にしながら近藤はちらりと後ろを確認する。

山崎が敵に警戒をしつつも懸命に新八への応急手当てを続けていた。新八の顔は紙のように白く血が通っていない。呼吸も耳を澄まさないとい認識できないほどであった。

「……爆弾じゃなかったってのか。」

「ええ。あの音はね、タイマーの音。勘違いして慌てているあなたたちはホント、滑稽だったわよ？彼女が目を覚ましたと同時に機巧が作動するに設定しておいたの。だからすぐ近くにいたそのメガネ君と茶髪君が最初に被害に遭っちゃたわけ。」

「……止める方法は。」

「ないわ。」

交渉に乗り出そうとした近藤だったが、それはすぐに潰えた。ない。そうはつきりと言い切る梓。その声音には薄ら寒いものを感じた。

「交渉するでもなし、敵に付けるものにわざわざその解除方法も組み込んでおくとお思い？ そんな機能を付けるぐらいならもっと趣向を凝らしたものを備え付けます。まあ……毒薬のように取扱が危ないものはそうかもしれないですけど。」

「デメー悪魔だな……。」

「褒め言葉ですわね。」

「おいお譲さんよ。説明会はその辺にしといて、いい加減戦ってもいいかい？」

「あら、ごめんなさい提督補佐さん。……今は団長、でしたっけ。」
「さあ、提督お守係じゃねえかな。」

呆れたように槍を構える阿伏兔。しかしそんな阿伏兔を手で制する。阿伏兔の代わりに戦うとは思えない。自らそのつもりはないとはつきり言っていた。
なのになぜ？

近藤、土方もそんな様子をいぶかしげに睨む。

「もう老体に鞭打つ必要はなくてよ。」

「どういうことだ鴉。」

「あなた方も怪我している割にしつこいですね。ですから、もう無駄だとおっしゃってるんです。直にここは崩れますから。」

「崩れる……！？」

予想外な言葉に耳を疑う土方。

「この廃墟の至る所にガソリンや火薬、そして火種を仕込みました。」

時限式なのでそろそろ引火する頃じゃないでしょうか。」

「聞いてねーよ俺ア。そんな物騒なもんいつ仕掛けてたんだ？」

「ここに到着して直ぐに。いいじゃありませんか、1つや2つサプライズがあつたほうがスリルもありますでしょう？いくつかは火種が付く前に鏢迫り合いの魔擦熱で引火してしまつたみたいですから。」

何度かの爆音はその音だったのか。合致がいく土方。今回真撰組は銃火器の類は建物の崩落の危険があるとして使用しなかった。そのため敵も傍目からはそのような武器を用いてはいなかった。なのに爆発音らしき音がする。

ずっと疑問に思っていたのである。

そう思った矢先にまた一つ。外に火花が散った。

「過激だねエ。それが鬼兵隊の教育方針ですかい？」

「そんなことはありませんわ。……第一、私は高杉を主とみなしたことは一度としてありませんから。」

この場にいる全員が程度こそあれ、驚きの色を見せる。

初めて彼女から殺気というものが放たれた。

そして纏う空気が変わっていた。

優雅な蝶から、乱暴な蜂に変わったかのように。

「この際だから言っておきます。私は別に鬼兵隊や春雨はもちろん、あなたたち幕府や攘夷活動にも興味はありません。私の目的ただ一つ。」

凜とした声が靡いた。

「――坂田銀時の死だけ。」

その言葉がスイッチだったように。世界が震えた。そこかしこから爆音が鳴り響き、火を吹く。このフロアも例外ではない。

灯油独特の油臭い匂いと共に真っ赤な炎が部屋を走る。それはすべてを包み、気が付けば真撰組と春雨との間には火の壁が隔たっていた。

「このままいたら良い感じに焦げちまう。さっさと船に戻るかお譲さん。」

「ええ。」

「逃げんのか!!」

「……また近いうちにお会いするでしょう。」

「だな。アンタらも早く逃げたほうがいいぞー。」

その言葉を最後に大男と鴉は炎の中へと消えていった。

「待ちやがれ……!!」

「駄目です副長!!火が……!!」

火に遮られ、真撰組は追うことができない。灰色のコンクリートは
てらてらと不気味に輝く。

沖田はバズーカ砲を2人が消えた方向へと基準を合わせる。しかし
血が足りないためか体力が底を尽きたのか。向けただけでトリガー
を引くことなく、沖田は力なく背中から倒れ込み近藤に受け止めら
れた。

「トシ！こっちは怪我人がいる！！急がないと逃げ遅れる！」
「……クソッ！！」

近藤は沖田を、山崎は新八を背負う。

土方は落ちてくる瓦礫を掻き分け、悔しい思いを胸に抱きつつまだ
燃えていない非常階段へと駆け出した。

俺に触るとやけどするぜって火遊びでもしてるのアンタ。そろそろ卒業したほ

銀時「今回はお知らせがありまーす。」

新八「活動報告で募集していた短編企画の投票が締め切られました
！！ということでの場で結果を発表したいと思います。」

神楽「て言っても1票しか来てないケドな。」

新八「そこはカミングアウトしちゃ駄目なところオオオ！！！」

銀時「でもさあゝ下手にたくさん応募ありがトウース！！とか言
っちゃって後でいろいろつつこまれるとイタイじゃん。なら最初か
らカミングアウトしたほうがよくね？」

新八「いやそれはそうだけでも！！てかなんでオー●リー春●のネ
タに行った！？」

神楽「てことで？の2週間の同居人に決定したアルよー。どんどん
ばふばふー。」

新八「結果発表軽くない！！？」

短編の投票ありがとうございます。名前を出して良いとまだ許可をいただいていないので伏せさせていただきます。

だんだんアクセス数も安定してきましたもうすぐ2万打超えそうです、本当にありがとうございます!!

塩辛い饅頭は食べたもんじゃない（前書き）

追試終わりました——！！！！

結果は知らないですけど、とりあえず終わりました。

そんなこんなで小説もようやく一つの山場が終わります。

前回ほどは長くないので安心して下さい。初期に比べれば長いですが、
けれど。

ではでは本編へどうぞ！！

塩辛い饅頭は食えたもんじゃない

そこは暗い穴の中。正確には神楽がぶち空けた床の穴の下、先ほどより一つしたのフロアである。そこでは、刀がぶつかり合う音が響いていた。

いや、刀ではない。木刀と、血濡れの刃である。埃臭く、暗い中銀時と神楽が刃を混じり合っていた。

「……神楽!! もうやめろ!!」

銀時の悲痛な叫びが響く。

一方の神楽は無言で刀を返す。また、銀時の体に傷が増えた。そんな様子を一人。神威がのんびりと傍観していた。

「ちょっとおにーさん。もっと本気出してよー。見てるこっちちょー暇なんですけど。」

「くっそ……! 神威デメー神楽に何しやがった!!」

神威に話しかける間も神楽の攻撃がやむ様子はない。むしろ加速している。

神楽の刀が銀時の二の腕を切り裂く。銀時たちの周りは血の花で彩られていた。

「鬼兵隊がおもしろいもん開発してるって聞いてみたらさ。天人や

人間を思い通りに動かせる機巧を作ってるって言うじゃん。貸してーって頼んだらサンプル？試作品？それくれたんだよね。とりあえず実験でことでおにーさん操っても良かったんだけど、でもそうすると俺と本気の殺し合いができないよね。だって俺が操ってるんだもん。結果のわかりきってる死合なんて楽しくない。ってことで。」

銀時の右腿から鮮血が飛び散る。

「神楽に付けてみました♪」

「……！そんな理由で神楽に……！！」

「強い者が弱いのを支配して何がおかしいの？あ。ちなみにこの機巧の1番の醍醐味は操られてる本人は『全部覚えてる』ってところしいんだよね。だから神楽も全部体感してるわけ。メガネ君の腸の感触とか。1番隊長さんの血の温かみとか銀髪のおにーさんの斬った快感……とか♪ずるいよねー。」

けたけたと。不快な笑いが聞こえる。

神楽が『全部覚えてる』？そんなこたア分かってる。

だって神楽は。

新八の腹を刺した時も。

沖田の足を抉った時も。

こちらを初めて振向いた時も。

そして、銀時と戦っている今もなお。

ずっと。

ずっと。

涙を流しているのだから。

神楽に腹部を蹴られ、地面を転がる。そして銀時は自身の首に衝撃が走るのを感じた。

馬乗りになった神楽の左手が、銀時の首を掴んでいた。片手だけの神楽の手を銀時は振りほどけない。半端じゃない力で首を締めあげられる。

いや、首を絞めると言う生半可なものではない。頸椎を折ろうとしているのだ。

「ぐ、かはっ……………!!」

「……………」

淡々と銀時の首を掴む神楽。苦しむ銀時の頬には神楽の涙が滴る。その泣き続ける神楽の頭上から、銀に鈍く光るものが見えた。血に塗れた刀。

それを銀時の胸に突き立てようとさらに振り上げ、そして。

「か…………ぐら…………?」

動きを止めていた。

刹那。建物が揺れる。

あちこちから炎を吹き、爆発音が耳を揺らした。その隙間から他人事のような神威の呟きが覗く。

「あらら。時間切れか。」

一つ火が爆ぜる。

気が付くと、体や首にかかっていた重みがなくなっていた。

「げほっ……！？神威！！」

銀時が痛む喉を押さえつつ正面を見据えると、火柱を隔てた向こうがわに神威が悠然と立っていた。その隣には神楽がいる。

「物足りないけど、今日はこのくらいにしとくね。じゃーねーおにーさん。」

「ダメー逃げる気か！！」

ぶわりと火が立ち、銀時は神威たちに近付くことができない。

「またすぐに会えるよ。その時は本気出してよね、じゃないと張り合い無いからさ。」

赤く照らされた顔は、やはり笑顔。

だが言葉はその表情とは裏腹に、青く冷たい。

「その時まで神楽は預かっとくね。」

その言葉を最後に神威と神楽の姿は頬の尾の壁に覆い隠され、見えなくなった。

塩辛い饅頭は食えたもんじゃない（後書き）

コレ目当てに見てる人はいないと思われませんが、楽屋コーナーはお休みです。

神楽誘拐パート。突入パートを経ての神威との激突パートはひとまず終わりです。長かった。本当に長かった。そしてまだ続くらしい。作者である自分でも予測ができません。

ちなみに今回のお話の続きが少しありまして、この後。

炎の中で「ちくしょう！」叫んで床を叩きまくってる銀時を土方が発見。それをかっこよく土方が止める。そして脱出。という構想がありました。なんかややこしいしまた長いしということで割愛。かっこいい土方さんが見たかった方は申し訳ないです。

次回！脱出した後の銀時たちの話。

ではなく、燃え盛るビルから脱出した阿伏兔と梓のお話です。

バイクで事故ると即全身強打（前書き）

最近パソコンが開けない……！

本編はジミーより地味な会話ですみません。

バイクで事故ると即全身強打

エンジン音が耳に届く。阿伏兎と梓はバイクに乗り走っていた。しかし足元に見えるのは日に照らされ暑くなっているアスファルトではない。真っ青な空に小さく見える街。

そう、空の上。

ヘルメットからはみ出した黒髪が風になびく。火を吹くあのビルは既に見えない。ただその場所からであろう黒煙がゆらゆらとたなびいていた。

「本当に迎えに行かなくて良かったのですか？」

「神威とお譲ちゃんのことか。」

「他に誰がいるんです。」

「冗談だよ。」

普段慣れないバイクの運転に苦戦しながらも、阿伏兎はちらりと下を見る。

「あんまり大所帯で走ると下の厄介な人たちに感づかれちゃうだろう？」

「大所帯って……たったの4人ですわよ。」

「鴉さんよ、少し笑いってもんを気にした方がいいんじゃないか？
ったく……はいはい嘘です。嘘ですよ。だって邪魔すると殺されそうだったじゃん！アンタそんなわかりやすい空気も読めないの！！？」

「なっ……空気ぐらいは読めます！！」

ぎゃいぎゃいと喚く良い歳が2人。もしこの場が空中でなく地上だったのならば、こそこそと言われるのは避けがたい状態である。

「あの……団長さん。」

少し落ち着きを取り戻してしばらく経ち。梓は控えめな声色で空中走行バイクを運転している阿伏兔に話しかける。
しかし空を切る音で聞こえていないのか、返事がない。

「団長さん！」

「だん……あ、俺だ。えーっと、何ですかい鴉のお譲さん？」

ヘルメットのかぶっていないため剥き出しの耳元に大声で呼びかける。するとようやく返事が返ってきた。

聞こえていないと思ったが、単に慣れていない呼び名に反応が鈍かっただけらしい。

「お願いがあるんですけど。」

「お願いとは。ずいぶん可愛いねエ。」

阿伏兔がからかうように笑う。梓にとってはそこまで軽いことではない。

「あの、からかわないでくれます？」

「はははっ。すまない。」

「まったく……。」

「お願いなんざされなくても、鬼兵隊の旦那には言わないから安心してくれや。」

「！」

さらっと言う阿伏兔。

その背中では梓が驚いたように彼を見上げていた。

そう、梓が頼もうとしていたこと。ビルの中でのあの『失言』である。

もしあのことが鬼兵隊の誰かの耳に入りでもしたら大変なことになる。下手をすれば処刑ということも避けられない。だからこそ味方側で唯一聞いていた阿伏兔が言わないように頼む必要があった。

しかし彼は頼まずとも言わないと口にする。

「……ずいぶん優しいのね。」

「面倒事にはあまり首をつっこまない主義なんですね。」

「自分に火の粉が降りかかるから？それとも後処理が大変だから？」

「面倒事は上司の起こすので十分だからさ。」

ひと際大きく車体が震え速度が上がった。
街がさらに遠ざかり、代わりに現在江戸のシンボルであるターミナルに近付いた。

バイクで事故ると即全身強打（後書き）

新八「銀さん何してるんですか？」

銀時「作者に俺の出番を増やさせるためにちよつと呪いを……。」

神楽「納豆入りわら人形なんて……銀ちゃん通ネ!!」

新八「通って何処に精通してんだよ!!」

神楽「でも銀ちゃん。丑の刻参り朝早いヨ？神社も結構遠いし、起きれるアルか？」

新八「神楽ちゃんも以外に詳しくない!？」

銀さんごめんなさい、次回も出番は無いんだ……。

神楽ちゃんはあるけど。

次回は神威も出ますよ！

違反切符を切られたら社会勉強になったと思うのがお利口（前書き）

現在進行形で風邪をひきました。鼻水、喉の痛み、熱すべての症状を通過し現在の主な症状が咳になりました。ごふんごふん。

みなさん本当に体調管理には気をつけて下さい！！

本編はほんの少しだけですか残酷描写？が入ります。

違反切符を切られたら社会勉強になったと思うのがお利口

とある民間船の中でようやくけたたましいバイクのエンジン音が止んだ。しかし船内は何処を見ても民間船に見えない。巨大なエンジンが音を響かせ、かすかに火薬のにおいが充満する。そう、ただの民間船ではない。外はそう見えても中は春雨の小型軍艦なのである。

阿伏兎はなれない運転で固まった肩をほぐし、梓はヘルメットで乱れた髪を直していた。

そしておもむろに梓は歩きだす。

「何処行くんだ？」

「船内の状況を確認してくるだけですわ。すぐ戻ります。」

特に阿伏兎の質問には答えずそのまま通路に消えていく梓。

いつも置いてけぼりにされるのは何でかねエ。無表情ながら悲しい現実を思っていた阿伏兎だが、そんなことをゆっくり考えている暇もない。一応形だけであつても他の師団長に今回のことを報告せねばならないからである。特にお偉いさんへの報告を神威に任せればいろいろとややこしいことになることなること。

雑用ばかりで嫌になる。自分も奥に向かおうとしたその時。

「あ。間違えた。」

ドゴオオオオオオン

妙に伸びた口調にいきなりの衝突音。

嫌な予感を胸に抱きつつ阿伏兎は後ろを振り向いた。

なんということでしょう。

先ほどまで自分がいたところに金属片となったバイクが散乱しているではありませんか。

その中心には自分の上司とその妹君。

「つてあぶなあああ！！提督ウウウウ！！俺殺す気！！？あまりの動揺にビフォーアフター風にナレーションしちゃったじゃん！！」

「ごめんごめんアクセルとブレーキ間違えちゃってさあ。」

「交通事故的な弁解いらないから！まったく反省してやしねえ……。」

「あーあ、だめだこりゃ。もう使い物にならないよこのバイク。弁償代、阿伏兎の給料から差し引いとくね。」

「なんで上司の失敗俺が拭わなきゃいけないの！！？」

そうぎゃあぎゃあ喚く大の男が二人。実際に叫んでいるのは阿伏兎だけだが。

がしゃん。

その音で会話が中断する。聞こえたほうに顔を向けると血に塗れた刀が。

そして同じく血にまみれた神楽。その目からはまだ涙が流れ続ける。本当は泣くことはあり得ない。操神楽られた者に与えられるのはただ『観ていること』だけ。それ以外は操縦者神威が命令しなければ何も行動を起こすことは無いからである。

殺す道具を手放し、ただ涙を流す人形となっている神楽に神威が近づく。とてもつまらなさそうに。

「まだ泣いてんの？」

「……。」

言葉を口にするわけではない。すべての動きの主導権は神威が握っているのだから。

「もう無駄だよ？ お前が元の鞘に戻る道理は無い。現にお前自身
が壊したろ？ 元々人間たちと一緒にいることさえ無理があったんだ。
俺たちの力は人間たちにとって強過ぎる。」

くると血に濡れた刀を弄びながら淡々と。神威はそう口にする。
残酷な言葉は心を深く深くえぐる。

「夜兎は争いを好む生き物って言われてるけどさ、なんでか知って
る？ それはね、闘いたいから。血を求めているからだよ。それ故に
夜兎は己自身に争いを引き寄せるんだ。」

神楽が膝から崩れ落ち、へたりと座り込んだ。
それでもなお、神威は言葉という凶器を突き刺す。

「お前も引き寄せただろ？ 俺という血を浴びるきっかけを。」

自分の意志では動かないはずの神楽の腕が手のひらを見るように上がる。

そこにあるのは真っ赤に染まった両手。瞳から溢れる透明な涙が手のひらに零れる。そして手からまた滴る頃には、血のように赤く光っていた。

「神楽。夜兔の血はお前のことを何処までも追っていく。逃げられないよ。」

その言葉が、繋ぎとめていた最後の糸を断ち切った。叫びは声となって発せられることは無い。

ただただ。周りから低い轟音が唸るだけであった。

違反切符を切られたら社会勉強になったと思うのがお利口（後書き）

次回からはビル倒壊後の真撰組、銀時の動向が主になります。

銀時「次回からはようやく俺の出番か。」

神楽「それ嫌味アルか？次回から出番のない私への中てつけアルか！？」

新八「神楽ちゃんは出てこれるだけいいよ。僕なんて今会話にすら入れないし（倒れてるから）、解説部分でしか出してもらえないんだから。」

新八君、その件に関しては本当にすまないと思っている。出番のあるメンバーに偏りがあるのは、作者の腕の無さと趣味が関わっています。

また神威と阿伏兔が原作と比べてブレまくっていることに関しても謝罪申し上げます。阿伏兔なんてある意味滅多打ち状態。白旗を振りまわしたいです。

シリアス感が抜けない中、次話もシリアスです。

死人を出したくなけりや自分の腕前を考えろ（前書き）

サブタイ、「病院は風邪の温床」にしようと思いましたが、多方面の方々から怒られそうなのでやめました。

また近藤さんが神楽ちゃんへの呼び名

神楽君から

チャイナさん

に修正しました。

s a i c a様、ご指摘ありがとうございます。また、修正が大変遅れまして申し訳ありません。

本編は少ししっとりとした感じを頑張ってみました。

死人を出したくなくちゃ自分の腕前を考えろ

静かな廊下の中。志村妙は一つの扉の前に供えられた長椅子に座っていた。真っ白で大きな扉。その上部の壁には赤いランプで『手術中』と照らされている。

ここは大江戸病院。そして扉の向こうでは新八の治療が行われていた。妙は唯一の身内ということで呼び出しを受け現在に至る。

無音の消毒薬の香りのする廊下にいくつかの足音が鳴る。数は3つ。妙がその方向を見ると。近藤、土方そして銀時がいた。皆包帯やガーゼを付けており、痛々しい。沖田は大腿の出血が激しかったため、別室で治療を受けている。そのためこの場にはいなかった。

先に近藤と土方が妙に向かい謝罪した。自分たちの注意が足らずこのようなことが起きて申し訳ないと……。近藤はボケず、妙は近藤に暴力を振るわず。この状態を見ても深刻ということがわかる。

そして近藤は真撰組の事後処理のため、病院を後にした。扉の前には妙と銀時と土方という珍しい組み合わせになっていた。

沈痛な面持ちで銀時が話を切り出す。

「……新八の容体は？」

「あまり、良くないみたいです。内臓も少し傷ついているみたいで治ったとしても後遺症が残るかもしれないとお医者様が。」

「……そう、なのか。」

妙が立ちあがる。銀時と土方の位置からでは妙の後ろ姿しか見えない。

「そんな情けない声出さないでください。あの子も覚悟の上であな
たのそばにいたんですから。それよりも。」

妙が前を見据えた。それはとても背筋が伸び、凜としていた。

「神楽ちゃんを助けてあげて。」

「……！」

「あんた、それどういう意味かわかって言ってるのか？」

いくら操られていたとはいえ、新八に大怪我を負わせたのは神楽である。被害者の家族としては複雑な気持ちであるはず。
しかし彼女は曇りのない瞳でそう頼んだ。

「わかっていますよ。だってあの子は私の妹ですもの。家族を助けてほしいと思うのはおかしいことかしら？」

「けど、妙お前……。」

「私はもう身内を失いたくない。こんな理由じゃ駄目かしら。」

訴えるように銀時の言葉をさえぎる。

「銀さん。あなたが立ち止まったらすべて終わってしまうのよ。侍としてあなたについて行った新ちゃんの思いも無駄になる。神楽ちゃんも敵に捕らわれ、自分が新ちゃんを傷つけてしまったと泣いたままになってしまいます。」

「……。」

「お願い、します。」

そう言って、妙は銀時に頭を下げた。

新八を神楽を護り切れなかった情けない男に。

そんな情けない男をお前はまだ、信じれるのか？

俺はまだ、

頑張れるのか？

いや、

やらなきゃいけねーんだ。

「……新八はこんぐらいじゃ死なねエ。俺も死なねエ。ぜってー神楽を連れ帰ってくる。だから……安心して待ってとけ。」

「銀さん……、ありがとう。」

「……。」

「あと、俺たちが帰ってきたそんな時ア……笑顔で出迎えてくれや。」

「わかりました。お料理たくさん作って待ってます。」

「……それだけは勘弁してくれ。」

音もなくランプが消え、扉が開いた。

手術着の医者が一人妙に駆け寄る。新八の手術は無事成功したようだ。だがまだ予断を許さない状況であり、意識のない新八はそのまま集中治療室に運びこまれた。

そう医師から話を受けた妙が気が付いた時には既に。

土方も銀時の姿はなかった。

死人を出したくなけりや自分の腕前を考えろ（後書き）

神楽「銀ちゃん、手を見せてほしいアル！」

銀時「手だア？」

神楽「新八も仕方ないけど見てやるヨ。」

新八「いや、仕方ないって意味分らないんですけど……。」

手を見せる2人。

神楽、じーっと手を観察する。

神楽「銀ちゃん……。」

銀時「んだよ。いい加減疲れたんだけど、もうおろしていいのか？」

そして、

神楽が銀時を殴った。

銀時「ぐぼは!!?」

神楽「銀ちゃんの変態!! スケベ!!」

新八「何が!!?」

俗に言う都市伝説レベルの手占いです。

- ・小指が長いと靈感がある。
- ・指を伸ばした時、小指が離れていると将来親から離れる。
- ・爪の見方によって女性的か男性的かわかるなどなど。

今回は

- ・薬指が長いとスケベ

ようするに

薬指↓男性ホルモン

人差し指↓女性ホルモン

長いほうが多いということなだけです。

男Ⅱスケベという概念。

完全にジェンダーですね。

次回は作者お気に入りなお話です。おたのしみに。

夜の病院と学校だけはどうにも慣れない（前書き）

前回の「死人を出したくなけりゃ自分の腕前を考えろ」が過去最高アクセスを更新しました！！結構うまくまとめたと思えた話だったので、すごくうれしいです。

読んで下さっている読者様、本当にありがとうございます。

では、本編をどうぞ。

夜の病院と学校だけはどうにも慣れない

「……こんなとこで何してんだオメーは。散歩か？」

「……。」

土方が妙のもとから離れたあと、すぐさまある場所へ向かった。そこは屯所でもなく。沖田の病室でもなく。

廊下を曲がったすぐの長椅子。そこには病院支給の白いパジャマを着た沖田が座っていた。

妙が集中治療室に入ったのを確認し、素知らぬ顔で土方は話しかける。

近藤が屯所に帰った後辺りから沖田がいたのはすぐに気が付いていた。ここからなら先ほどの話も聞こえていただろう。

細い腕にはチューブが伸び、隣に置かれていた点滴に繋がっていた。

「普段働けって言ってもサボるくせに、休めって言われたら動きやがる。どんだけめんどくさい奴なんだよ。」

「……うるせー土方コノヤロー。俺の勝手だろイ。」

青白い顔で反論する沖田。無理に起きているのだろう。その額にはうっすらと脂汗がにじんでいる。呼吸も心なしか頼りなさ気だ。

土方はその隣に腰掛ける。非難ありありな視線を感じるがそんなことは気にしない。

煙草を取り出そうとし、止める。病院であつたことを忘れていた。もちろん破天荒な歌舞伎町内にある大江戸病院といえども、院内すべて禁煙である。

「聞いてたんだろ。」

「旦那とメガネの姉貴のことですかい？　そういやア土方さん全然しゃべってなかったですねィ。マヨ禁断症状とでも戦ってたんです？」

「どんな症状だそりゃ。」

「……はじめて。」

会話に脈絡なく。

急にぼそりと、沖田が呟いた。

静寂が売りの病院の廊下でも聞き取りにくいほど、小さく。

「あん？」

「はじめてあのメガネが羨ましいと思った。不覚でさァ。」

「……総悟。」

「もう姉上はいない、戻ってもこない。そんなことは分かってやす。ただ、ほんの少し。ほんの少しだけ……、嫉ましいだけでさァ。」

ふうと小さく息を漏らす。

その横顔は、嫉むという悪い顔ではなくて。

懐かしいと綻ぶ顔であった。

「……姉って生きもんは強えーよなァ。」

「そうですねィ。」

同意する沖田の声。

姉然り、母親然り。

守るべき下の者がいる女は何かしら強い。

そう思い、しかし。土方はふと思いなおす。

「……いや、違うか。」

「はい？」

「脆いからこそ、強くあろうとしてんのか。」

「……土方のくせにうまいこと言ってるア。」

そう一言だけ言い、沖田は長椅子から立ち上がる。そしておぼつかない足取りで、真っ暗な廊下に消えていった。

土方もそんな沖田をただただ無言で見送る。

そして沖田とは反対の方向へ足を進めた土方も、暗闇の中に溶けていった。

後には誰もいなくなった長椅子だけが、ぽつんと佇んでいた。

夜の病院と学校だけはどうにも慣れない（後書き）

銀時 「長いよなァ……。」

新八 「何がですか？」

神楽 「わかんねーのかヨ新八ィ。この小説のことアル。」

銀時 「この話を合わせて28話目。その割にはあんまし進んでねエし？いつまで続ける気なんだよ作者。もっとう……スムーズにスパーンと簡潔に出来ねエのかよ。」

新八 「残念ですけどまだ続くらしいですよ？っていうか作者自身が何処まで続くか把握してないんですから。」

神楽 「じゃあ私は敵地に置いてけぼりで、銀ちゃんは精神めった殴り状態で放置された揚句、メガネは話が続くのに出番はないってことアルか。」

……。

こんなぐだぐだな小説への生温かい感想は随時お待ちしております。

戸締りのやり過ぎは依存症に発展するから気をつけようね（前書き）

バイトでまた投稿が滞りそうなので、その前にしちゃいました。

また現在投票で決定した短編を執筆中です。

できれば11月中にお届けできたらなあと思います。あくまで「できれば」ですが……。

今回はいろいろと分かりにくいかもしれません。

戸締りのやり過ぎは依存症に発展するから気をつけようね

時刻は既に真夜中を指し。月が一番高いところから地面を見下ろしている。

あれから銀時は大江戸病院から真つすぐに万事屋兼自宅に戻った。ポケットをあさりながら扉に手をかける。ここを新八と二人で飛び出してから丸1日が経っていた。もちろん鍵はかけたので開くはずがない。

そう思ったらいとも簡単に開いた。

「……はい？」

しばらく扉の前に立ち尽くす銀時。

傍目からは無言で冷静に考えているように見える。しかし脳内ではいささか混乱状態になっていた。

《ちよつとオオオオオオオオ！！何？空き巣？マジでエエエエ！！？いや、まず落ち着け、落ち着くんだ俺。家出た時鍵はかけた、絶対かけた、それは間違いね、うん。てことは何？空き巣さん堂々と玄関から侵入しちゃってるわけ。やっべーよ、イッチャッテルヨ。いろんなどころが飛んでるぜ。

だいたい作者マジでなんなんだよ。精神的ダメージの次は今度は懷的ダメージですか？ジャンプが大好き純粋なお兄さんな俺、なんかしましたか？だってひったくり捕まえたじゃん。社会に貢献したじゃん。

あれ、そういやア……。

……自転車借りパクしたな。
それエエエエエ！？今になってそのツケ回ってきてるウウウウウ
ウウウ！！？でも作者が考えたことじゃん！！俺強要されただけだ
もんね！！悪くないもんね！！
だーもーなんだよ！！第一今来なくてもいいじゃん空き巣！！うぜ
ーよ、超うぜーよ今時のキレる奴ら！！」

という感じにパニックになっていた。冷や汗ダラダラ。取っ手に添
えた手も地味に震えていたり。ツツコミ役がいなかったためそのまま暴
走するのみである。

しかし立ち尽くしているわけにいかない。意を決し、足を踏み込む。
駆けるという表現が正しい勢いでリビングに飛び込んだ。少しひや
りとした空気が顔を打つ。

そこはいつもの仕事場。別段荒らされてはいない。空き巣ではなか
ったようである。

だが、銀時は別の意味で信じられない光景を目にしていた。

「……………神楽？」

自分が普段座る大きな仕事机。その前に俯き、体操座りしている神
楽がいたのだ。

操られて、そのまま神威たちと共に行ってしまったはずの神楽が。
銀時の声に反応して、神楽が顔を上げる。その頬にはまだ生々しい
返り血が付いていた。

「銀、ちゃん……………」

つうと。神楽の目から涙がこぼれる。

「銀ちゃん……。私、頑張ったヨ。胸についてたよくわかんないもの取り外して、神威の隙をついてなんとか奴ら等の船から逃げれたネ。……。怖、かった。すごく……。怖かったアル。」

「……。」

「……銀ちゃあん!!」

神楽が涙を流しながら銀時のもとに駆け寄る。

そんな神楽に銀時は。

木刀を突き付けた。その無防備な喉元に。

「え……。ぎ、銀ちゃん？ どうして……。」

「どうしたもこうしたもあるか。……。テメエ、誰だ。」

神楽はその言葉を聞きしばらく呆けていたが、不意に笑みを浮かべた。

「……もうばれてしまいました？ もっと感動的な再会を期待してましたのに。」

その声色はもう神楽ではなかった。可愛らしい少女から、思春期を

越えた女のものに。

銀時にとってはあの時。神楽が連れ去られたときに聞いたあの女の声。

鬼兵隊の鴉。白鳥梓の声であった。

神楽の姿をしたものは髪に手を添えた。そして桃色の髪の下からは長い長い黒髪が顔を見せる。

「とりあえずその木刀、納めて下さらない？あなたと刃を合わせるために来たわけではないの。」

「……。」

赤い瞳に笑顔の梓が映る。その当人は不躰に梓を睨みつけたまま。なかなか木刀は地面へと下ろされない。しかし梓は銀時がとりあえず敵意を納めるまで話し始める気はないようである。

しばらくの沈黙の後。銀時は小さくため息をつき、愛刀を肩に担ぐように握り直した。

「いつから提督の妹でないこと、分かってました？」

「最初からだよ。」

「最初から……。よろしければ今後の参考に教えて頂けます？」

妙な緊張感の中。会話が進む。

「ああ？まず神楽の背はそこまで高くねェし、胸もそこまででかくねェ。わざとだろ。」

「そこは分かっていたいらしたの。正解です、服装と顔と声以外はいじりませんでしたから。」

「あと一つ加えとけ。アイツはあんな自分よがりな言い方はしない。もっと内面も研究するこったな。」

「……ご教授ありがたく頂戴しますわ。」

風が窓を叩いた。

それだけが静寂の中にひとつ落ちた。

戸締りのやり過ぎは依存症に発展するから気をつけようね（後書き）

銀さんをすごく喋らせようとしたら、当初の予定よりも3倍喋らせてました。会話文に分節投入ですよ。

でもこんなに長つつつい文章噛まずに言える声優さんって、本当にすごいと思います。

とうとう銀さんとオリキャラ梓の1対1の掛け合いです。

ようやくたどり着いた……！ここまで来れたのは読者様のおかげです……！ありがとうございます！

でもやっぱり会話は地味です。

売り物の服のたたみ方が再現できない（前書き）

正直に言いましょう。今回は地味地味会話です。

豪華にしたいくてもどうしようもなかったので、気持ち後書きを豪華にしました。

売り物の服のたたみ方が再現できない

天に浮かぶ月は、雲に姿を隠れていた。

梓はそのままくると体の向きを変え、机に向かい自室のようにそこに腰掛ける。あまりの無防備さに銀時は呆けていた。

梓は目元に手を移す。空色のカラーコンタクトが外れ、黒耀の瞳が顕わになる。

「あの。人ん家で勝手に何し始めちゃってんのアンタ？」

「何って……。見てわかりませんか？化粧直しです。」

銀時はがしと自身の頭を掻く。

「戦うつもりがねえんならさっさと帰ってくんない？アンタらのお遊びにつきあってるほど、こっちも暇じゃないんだけど。」

「お忙しい中ごめんなさいね。でも今は春雨の提督さんの指令じゃなくて個人の用事で来ただけ。コレを返しにね。」

顔に装着したマスクを外し、解放されたかの笑みを浮かべる梓があらぬ方へ手を伸ばす。

そこにあったのは一つのアタッシュケース。よくドラマなどで身代金を入れてたり、サラリーマンが持つような少しごつい感じのするものだ。

そんなアタッシュケースを開けてでてきたのは、チャイナ服。つんと、鉄の香りが舞う。

「あの子の服よ。服。血に汚れてたし、女の子が着のみままじゃ駄目でしょう？」

「……。」

銀時は無言で、綺麗に畳まれ机に置かれたチャイナ服を見つめる。その間に梓は変装用のチャイナ服を脱ぐ。下に着込んでいたらしい裾と袖が異様に短い墨色の着物が顔わになり、がらりと纏う雰囲気が変わる。

「……ほんとに服返しに來ただけかよ。」

「ええ。」

「ふざけんな。こんなもん今はゆうパックに詰めてワンコインで送れば済むもんだろうが。わざわざ手間暇かけてここまで来てんだ、他にも……企んでんだろ？」

言葉こそ軽いが、裏にはどす黒いものを感じる。

その感情は怒りかいら立ちか。

タイツを穿きながら、銀時の言葉を聞いていた梓だが、不意に銀時にある物をほおって寄こした。それを器用に片手で受け止める銀時。その手のひらに収まっていたのは、機巧。

銀時は直接は見えない。

しかし土方ら真撰組に聞いた特徴が一致していた。

神楽の胸に取り付けられたあの機巧に。

「特別に差し上げますわ。その類に詳しい方に見せて運が良ければ解除方法も見つかるかもしれませんね。」

「へー。特別奉仕品とか大好きなんだよね。あとオレ、悪運強いから。」

「喜んで頂けたようで。」

黒のタイツを穿いた細い足がロングブーツに入れられる。じじじとブーツのチャックが上げられた。

「……結局、何が目的だ？」

「目的？もう済みましたけど。」

「惚ける振りが下手なんだよ。神楽は勝手に連れ去るわ、変な機械つけるわ。おかげでこっち従業員いなくなっててんてこ舞いになってんだよ。その次は服といろいろ重要そうなアイテム持ってきちゃってしてくれてるし？」

「……。」

「俺に用があんなら直接来いよ。」

月を隠していた雲が音もなく霧散した。

やわらかく、月明かりが2人を照らした。

売り物の服のたたみ方が再現できない（後書き）

銀ドラ

銀時「豪華にするって言っていきなりこのタイトルは無いだろう？」

神楽「きつと『もし銀魂キャラクターがドラッカーを読んだら』の略アル！！この後書きに詰め込む気ネ。」

銀時「いや違うだろ。きつと作者愛知県民だからドラゴンズよつしよいたなことを書くんだよ。」

新八「それで『銀ドラ』ですか？」

神楽「おおくもうここにしか出番がないメガネ掛^{新八}け機。」

新八「メガネ掛け機じゃないからね、新八がメインだからね神楽ちゃん。」

銀時「ん？その封筒なんだ？金か？」

新八の手には3つの茶封筒。
それぞれ

「ぎんとき様」

「かぐら様」

「しんぱち様」

と筆ペンで記名されていた。

銀時「なんでひらがな？なんで筆ペンなわけ？とうとうPC依存症で漢字も忘れましたか作者。」

新八「知りませんよ。僕も急に渡されたんですから。」

神楽「そんなごちゃごちゃ前置きはいいから早く見せるヨロシ！」

新八それぞれに封筒を渡す。

神楽「5万円！来い！！」

新八「なんて半端な金額！？」

——映画青だぬき

かぐらの偏頭痛と白い粒

銀時「映画青だぬき……。」

新八「偏頭痛と、白い粉……?」

笑いをこらえる男2名。

神楽ですら笑いで床を叩いていた。

神楽「プクク……ぎ…銀ちゃんは? あ、開けないアルか?」

銀時「お、おう……。」

——映画青だぬき

ぎんときのハレンチ伝説

神楽「あはははは!! あたってるヨ!! 毎日が銀ちゃんハレンチ伝説更新中アル!!」

銀時「お、おまつ……!! わはははは!! ひどいぞソレ!! 誰が更新中だぁ!! オイ新八お前もさっさと見ろ!!」

新八「わ、くくくく、わかりましたよ。」

——映画青だぬき
しんぱちのど派手なパジャマ

銀時「……。」

神楽「……。」

新八「……。」

銀時「これは、ないな。」

神楽「ないアル。」

新八「そうですね。」

本編ぶち壊しですみません。
参考サイト…うそこメーカー

面接は人の目かネクタイの結び目を見ながら喋れ（前書き）

前回の銀ドラの略を記載するのを忘れていました。

「銀魂キャラクターが映画ドラ●もんにのび●の代わりに出ていた
ら」

の略でした。

琉叶さん！感想でお教えしました記載が間違っていました。

嘘情報を与えてしまい、申し訳ありません。

今回は後書きまで話が続きます。

1話として投稿したかったのですが、なんか中途半端なので載せて
しまいました。

面接は人の目かネクタイの結び目を見ながら喋れ

月明かりだけが、2人を見つめている。

銀時の言葉にゆっくりと耳を傾けるかと思いきや、視線も向けなかった。それどころか化粧道具を取り出して顔に施し始める。それだけ、自分が優位に立っていることを強調したいのか。

興味がないのか。

銀時が知る由もない。

「幕府の子犬さんから聞かれましたの？」

「子犬ってほどかわいかなーがな。俺に恨みがあるならこんな回りくどいことする必要ねえだろ。それとも何だ？直接やり合う自信がないってか。」

窓の外で季節外れの鈴虫がなかった。けれどそれは一瞬で。すぐに静寂が支配する。

梓の手元が再開する。鏡を見ながら銀時を見ることなく言葉を紡ぎ出す。

「……確かに。私は坂田銀時。あなたを殺すことを目的に動いています。けれど、すぐに殺してしまっただけはあなたは苦しむことなくこの世を去る。それが私には耐えられませんの。」

「……。」

「あなたの心が1番壊れる方法で。あなたがとても苦しみ、もがいた末に殺す。だからこの場ですぐさま殺しても意味がない。たとえば、その方法でどれだけの人が苦しもうとも、死のうとも、関係な

い。」

最後の一言を言う時。梓の目がついと細まる。

くるりと。まつ毛が綺麗に上に向いた。

部屋に大きな音が響く。しかし梓は気にも留めない。銀時が机を思い切り叩きつけた音。何も言わないが、代わりに紅い目は饒舌に怒りを語る。

「神楽を返しやがれ。」

「……嫌よ。それじゃあなたが苦しまないじゃない。」

「デメエ……!!」

赤の口紅を取り出した。それを整った唇の上に誘う。そして化粧道具を片づける。

パチンと音を立て、アタッシュケースが閉じられた。

長さが違う黒い手袋を取り出し、嵌める。

右手に嵌めたのは手首ほどまでしかないフィンガーレスグローブ。

もう左腕に付けたのは長さがとてもあり、二の腕の上の方まで伸びた。大分素肌が隠され見えるのは肩口だけである。

「現在春雨は戦艦の修理部品調達のために、民間商業船に偽装した小型の武装船をターミナルに停泊させています。」

さらりと流れる黒髪が簪で綺麗に結わえられる。ちゃんと綺麗な音を鳴らした。

「そして本日を数え5日後。地球視察の名目でその小型船に提督さんが乗り込みます。もちろん、私も。そしてあなたの大事な子もね。」
「……！」

ふわりと紅の羽織が梓の華奢な肩に止まる。黒が基調の着物にその紅はより一層鮮やかに映えた。鬼兵隊、白鳥梓。鴉と呼ぶべきだろうか。銀時に初めてその姿を見せた。

そして初めて梓から銀時と視線を合わせる。顔には淡い笑み。しかし纏っている気配は、とても禍々しく。

銀時は幾度となくそれを浴び、自分がそれを帯びたこともあるそれは。

殺気であった。

それもある意味純粹なもの。そう感じた。

「では……5日後。お待ちしていますわ。」

そう断りの許されない招待の言葉を告げ、鴉は窓から飛び立った。

面接は人の目かネクタイの結び目を見ながら喋れ（後書き）

ぱたぱたと、窓から吹く風でカーテンが翻る。

外を覗いても、何処にも梓の姿を見つけることは叶わなかった。

ひやりとした風が顔を打つ。だが逆に頭の中は煮えくりそうだった。銀時は乱暴に窓を閉めた。

「……。」

机の上には綺麗に折りたたまれた神楽のチャイナ服。しかし、それは血液で薄汚れていた。軽くこすると、もう固まっっていて簡単には落ちなさそうだった。

普通ならゴミ箱に突っ込むところだが。

「……洗ってやらねエとな。」

神楽はこの服をお気に入りと言っていた。

着るものがないということは無いのだが、捨てたとばれたらと逆ギレされそうだ。

洗濯機に押し込もうと思いつながら、服をわしづかむ。

「どうせならあっちで洗ってくれりゃいいのに……。何処までこつちを忙しくさせてーんだよ。」

ことん。

服を持ったとたん。床に何か転がった。

暗い室内には少し似合わない。ピンクの丸いもの。

神楽の服のポケットから落ちたのだろうかと、拾いあげる。

それは可愛い包みに包まれたキャンディだった。

ころころ。

ころころ。

遊ぶように銀時の手のひらの上をころがる。

そのキャンディを見たことあるような気がして。

考えているのか銀時は目を細め、そして丸くした。

「……あの時のか。」

合点がいったと言わんばかりかまじまじとそのキャンディを見つめ。

自身のポケットにねじ込んだ。

「記憶の引き出して案外へそくりが隠れてる」
……一応執筆時のサブタイトルです。

一人ぼっちで座ってるときの孤独感は半端ねェ（前書き）

お久しぶりです、旭日です！

ほぼ1カ月ぶりの更新です。でも内容地味ですみません……。

今回はお知らせがございます。ので普段後書きを読まない方は今回だけでも後書きを読んで頂きたいです。

一人ぼっちで座つてるときの孤独感は半端ねェ

「おっ、鴉の譲さん？」

背中から不意に声が聞こえる。

聞き覚えのある声に振り向くと、いたのは見慣れた顔。

「団長さん。」

場所は変わり、春雨本艦の中。

万事屋から立ち去った梓はそこにいた。そして廊下を闊歩していたところ、後ろから阿伏兔から声をかけられたのである。

「丁度良かった、探してましたのよ。提督さんの妹は今どちらに？」

「お譲ちゃんなら確か……、この廊下の突き当たりを右に曲がって一番奥の左手側の部屋にいるぜ。」

「ありがとうございます。あの、もう一つよろしくて？」

「なんだい？」

「その大荷物はなんですか？」

「……読み直すんだとき。」

おまけにコレ、俺の給料から引かれたし。

勘弁してくれよ、そう愚痴る阿伏兔が抱えていたのは銀魂原作全巻であった。

空気が抜けるような機械音を立てて金属製の戸が閉まるのを背で感じた。

こじんまりとした殺風景な部屋。

その隅に置かれていた椅子に、黒い衣装に身を包んだ神楽が座っていた。

神楽の着ている黒いチャイナ服は神威が直々に手配したものらしい。妹思いなのか、ただ単のゲーム感覚なのか真意はわからない。梓は知ろうとも思わないが。

洗脳を解いていないので相も変わらず、神楽の顔に表情は映らない。しかし彼女の頬には、未だ涙の跡が居座っていた。

「……。」

阿伏兔の話によれば、洗脳が始まり志村新八という少年に手をかけた時から、船に戻って神威が話しかけるまでずっと絶えず泣いていたらしい。

神威が何を言ったかは知らない。

ただ、
冷酷で

残酷な言葉を彼女に突き刺したのは、容易に想像できた。

「ねえ、神楽ちゃん。」

きつと彼女にはすべて聞こえている。

ただ話しかけても返事が来ることは無いだけで。

梓は目線が合うように神楽の前でかがむ。

無機質な瞳が特に意味もなく返ってくる。

「あの言葉と笑顔は嘘だったの？」

返事は帰ってこないとわかっているのに、自分でも何が言いたいの
かよくもわからずに。

「本当にあなたは、これでよかったの？」

それでも梓はなお言葉を紡ぐ。

「もう……あの場所に還りたくはないの？」

そう、問いかけの返答はあるはずなかった。
なのに。

するりと。

たった。

たったひとすじだけ。

流れるはずのない涙が。

神楽の頬に、涙が落ちた。

一人ぼっちで座ってるときの孤独感は半端ねェ（後書き）

新八「銀さん、神楽ちゃん。また作者からお知らせがあるそうですよ。」

神楽「長いこと更新しなかった謝罪会見でもする気アルか？」

銀時「てか、なんか嫌な予感すんだけど俺。」

神楽「嫌な予感？」

新八「銀さんするどいですね。年明け後テスト週間突入のお知らせだそうです。」

銀時「やっぱ来たアアアアア！！」

神楽「またかよオオオオオオ！！今回の1カ月更新停止といい作者殺されたいようネ……。」

銀時「で新八ィ、こんな仕打ちしといて何もないってこたア……ないよな。それなりの賄賂的な何か用意してんだろ？」

新八「僕に殺気を向けるな！えー賄賂じゃないし、僕らにはありませんけど、それらしいものは読者の方々にはありますよ。」

銀時「読者？んなもんでもいいわ。」

神楽「ずるいアル。おこぼれでもくれよメガネ。」

新八「だからアンタらは僕に非難の言葉を向けるな！前回好評だった短編投票第2弾を開催するんですよ。」

神楽「マジでかあ！」

銀時「好評だったからってすぐにまたやるなるたア、作者調子に乗り過ぎだな。」

新八「まともにお知らせして下さいよ二人とも……。」

銀時「はいはいわかったよ、わかりましたよ。今回のエントリー作品はこちらですー。」

？雪うさぎ

？本当の強さとは

？銀魂、電撃デイジー

？はた迷惑な通り魔

？WORKING!、スケッチダンス

？オリジナル

新八「？などはエントリー番号、その後に題名が書いてあります。原作名が書いてあるものはまだ題名未定のものです。詳細・あらすじはこの後活動報告にて掲載があります。」

神楽「お前らが読みたいってものを感想やメッセージ、活動報告に書くヨロシ。できれば『何番が読みたい』『〇〇に一票』みたいに分かりやすくヨ。」

銀時「投票終了日は来年の2月12日日曜日。……半端じゃね？」

新八「と、とにかく。一番票を頂いた作品は、掲載は2月以降となりますが必ず投稿されます。」

全員「投票お願いしまーす!!」

テスト、なぜあるんですかね……。

短編投票は更新が遅くなるためのお詫び企画です。
図々しくてすみません、投票お願いしまーす!

用事がある日は大抵来客という邪魔が入る（前書き）

とうとう自分がすんでいる地域にも雪が降ってきました。完全防寒状態を外に出たのですが。

顔だけ何も対策しておらず吹きさらし状態。
か、乾燥してしまう……！

今回は今までの暗さを少し払拭させてみました。
ただ、拭いすぎたかもしれません……。

用事がある日は大抵来客という邪魔が入る

気が付けばすっかり夜が明け、東から日が差し込んでいた。家の中はまだ暖まりきってはおらず、少し冷えてしんと静かであった。

疲れてると言うのにろくに睡眠がとれなかった。こんな状況でゆっくりに寝てるのもどうかとは思うが。

愚痴を言うのはもちろん、話す相手も近くにはいないので無言でいそいそと洗面所に向かう。顔を洗うとそこには死んだような目のいつもの自分の顔があった。

だるい体を動かし、電話の前に立つ。

1件。

そして1件

また1件。

忙しくなさまざまな所へと電話をかける。

逆に。

1つ。

また1つと。

こちらにかかってくる。

何処にかけても、かかってきても。その口調は特には変わらない。

ときどき珍しくメモを取る動作をするが、それもまるでたわいもない世間話をしているよう。

ようやく落ち着いたかと思いきや。今度は出かける準備をし始めた。そして洞爺湖と印字された木刀を腰にさしたところで。

こんこん。

少し軽めのノックの音が銀時の耳に届いた。

「……こんな朝早くから誰ですかー。」

のろのろと銀時は扉をあける。
そこにいたのは機巧家政婦ロボ、たまが佇んでいた。

「おはようございます銀時さま。先月分と今月分の家賃を受け取りに参りました。」

「……あのーこの展開で何でコレなの？ちよつとどころか大分KYじゃないですか毫碌バーさん。それしか考えることがないんですかコノヤロー。」

「KY、『危機予知』の略ですね。政治のニュースでも見てたのですか？」

「寸分たりとも見てねーよ！むしろそっちの意味で使ってる奴がKYだっての！！」

「そうなのですか。あとお登勢さまから伝言がございます。」

「伝言だア？」

「『先先月分請求しなだけありがたく思いな、このクソ猫が。』」

「いや頼んでねーし！！押し売りの優しさは求めてないからね！！」

金がないから今は家賃は渡せないということをつまに伝えた。
ちなみにここで来たのがたまであって良かったということを経時は知らない。キャサリンであった場合前回の雰囲気はさらにぶち壊されていくであろう。

「お登勢様にはそのように伝えておきます。私は今日明日メンテナンスのため源外様の元に向かいますので、明日はキャサリンさまがこちらに使わされると思います。」

「……おい、たま。これから源外のジジィんどこ行くのか？」

「はい。」

「そんなやついでにコイツ持ってってくれや。話はもうじーさんに通してあるから認知症になってなけりゃわかんדר。」

たまに手のひらほどの大きさの包みを渡す。小さく機械音がたまから発せられる。何も変わらない瞳でしばらくまじまじと見つめていたが、そのまま受け取った。

そうして一言失礼致しますと会釈をし、たまは階段を下りて行った。銀時はというと、扉を閉め外に出ていく用事も終わってしまったので寝ようと布団に向かった。

布団にもぐりこみ目を閉じたのと同時間だろうか。とんとんとん。

今度は拳で叩くような少し強めのノック。

仕方なしに体を起こす。今日は来客が多い日である。

「つたく……。今度は誰だよ……。」

「坂田銀時くんいますかー？」

「……。」

ぴきつと効果音が聞こえるぐらいに、体の動きを止める。

そして、せっかく起こした体をまた布団に沈める。銀時は完全に居留守を貫くことを心に決めた。

しかし相手はそんなことはお構いなし。ノック音とうざい大声がひたすら万事屋玄関前にこだまする。

「びりりり。もしもし桂小太郎ですけどー。さくさく。」

「……。」

「むしゃむしゃ。坂田銀時君はもぐもぐ。御在宅でしょうか。もしやもしや。」

「……………」

「びりりり。もしやもーしゃ。桂小太郎ですー。むしゃむしゃ。銀時君さくさくさく。いらっしやいませんかー。」

「……………」

勢いよく玄關の戸が放たれた。

銀時が青筋を立て、イライラの原因を怒鳴りつける。

「シヤラアアアオオオプ！！！」

「びりりり。なんだ銀さくさく時、いるじゃないか。ならさつと出ないかむしゃ。」

銀時が怒鳴りつけた先にいたのは、んまい棒のゴミ山に埋もれ、んまい棒を食しているた桂小太郎であった。

銀時曰く電波系攘夷浪士桂小太郎は、マイペースに新たなんまい棒の包装紙を破っては食べ、破っては食べていた。

「もしやもしやむしゃむしゃうっせーんだよ！！ここはト●コの世界じゃねえんだよ！！喋るか食うか立ち去るかどれかにしやがれ！！」

「銀時……そんなに食べたいのか？やらんぞ。」

「話を聞けエエエエ！！つかむしろ黙れよ。黙ってくれよズラアアアアア！！」

「ズラじゃないもしや。らだ。」

肝心なと言えてねエエエエエ！！！

桂のみならず、十分銀時も近所の騒音のようになっていた。

用事がある日は大抵来客という邪魔が入る（後書き）

やっと投稿できました！

このお話は9月ぐらいから既に出来上がっていたので、もう投稿したくてたまりませんでした。まず、ここまで連載が続いたのも奇跡に近いのですが。

では、今回の裏話を銀さんたちに話してもらいましょう。

神楽「ってな感じでバトンが回って来たネ。確か今回たまとズラが出て来たけど、実際出す気さらさらなかったらしいアルな。」

銀時「作者曰く『いつの間にか出てた』らしい。ってか聞いてねエよ誰も。」

新八「もっと言うと坂本さんを出したかったそうですよ？」

神楽「もっさんアルか!？」

銀時「あのもじゃもじゃ出したらこの小説もっと收拾つかなくだらうがー!」

新八「仕方ないですよ。作者の好きなキャラランキングが

1. 銀さん

2. 近藤さん

3. 坂本さん

なんですから。」

神楽「濃いラインナップすぎるだろ。」

銀時「だいたいこういう言いにくいことは俺らに言わすなよ。大体こういうことやらの、自分で言っただけ批判とかクレームが面倒なだけだろ。」

新八「もつと言うとこの方式で書く方が時間かかるらしいですけど……。」

銀時「へー。知らね。」

本当に、まだたまは出す目処はあったのですが……。何処から湧いて出てきたんだ、桂さん。

短編投票はいつでも大歓迎です！
感想も随時お待ちしております！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8242u/>

日常が1番ということは非日常が起ってから始めて気がつくもの

2011年12月25日21時48分発行